

さういふ習慣からくることを知らぬ世人は、ひとつの自然的なる力から来るやうにおもふ、そこでこんなことをいふ「王の容貌には神々しい氣品が刻まれてゐる」

正義

三〇九 流行はよさを作るが、そのやうにまた正義を作る。

三一〇 王と暴君。

私もまた私の思想を判断の背後に持たう。

私は旅をするごとに注意しよう。

設立の大いさ。設立のそんけい。

大いなる人々のよろこびは幸福な人々をつくりうることにある。

富の特性は惜しみなくあたへられることにある。

各々の事物の特性はたづね求められなければならない。\*力の特性は保護することにあり\*

力が取りすました顔をおそふとき。\*ひらの\*一兵士が大總統から四角い帽子をうばつて窓からとばすとき……

(一) 判断の背後にある思想。表出せられず、人にかくされてある思想。斷章三三七を参照。

三二〇ノ二 服従——空想によるところの。

三二一 輿論と想像とにもとづく勢力は或る期間支配する、さうしてこの勢力はおだやかで自由である。力にもとづく勢力はつねに支配する。だから輿論は世界の王のやうなものであり力は世界の暴君である。

三二二 正義は定められたところのものである、さうであるから定められたところの我々の法律はすべて、それらが定められたものであるといふ理由で、べつだんに吟味せられなくとも正しいものである、といふことがおのづからできるであらう。

(一) パスカルの思想をニコルが想起して書いたといふ『道徳論集』中の「貴族の身分について」第二説に、「ある國では貴族がたふとばれ他の或る國では平民がたふとばれる。この國では年長者がたふとばれ、あの國では年少者がたふとばれる。なぜであらうか。人々の氣に入つたからだ。定まるまではどうでもよいことであつたが定まつたのちは正しいこととなつたのである、それを亂すことは不正であるからといふ理由で」



三一三 何より大きなわざはひは内亂である。功にむくいられることを人々がのぞむなら内亂は必ずおこる、なぜなら誰も彼も自分こそむくいられるに値ひするものであるといふであらう。長子相續權によつて相續するところの愚人からかうむるであらうと案じられるわざはひは、さほどに大きくもなくまたさほどに確實でもない。

三一四 神はみづからのために萬物をおつくりになり、みづからのために苦しみと幸ひとの力をおあたへになつた。

君はこの力を、神にあてはめることができ、あるひは君にあてはめることができる。神にならば福音は規準である。君にならば君は神の座につくことにならう。ちやうど神を慈愛に満ちた人々がとりかこみ、神の力のうちなる慈愛の幸福を神に求めるやうに、そのやうに……<sup>(1)</sup>

だから君は邪欲の王にすぎぬことを認めそのことを記憶するがよい、さうして邪欲の道をえらぶがよい。

(1) そのやうに「君を邪欲に満ちた人々がとりかこみ、君の力のうちなる邪欲の幸福を君に求めるであらう」といふやうなことを補ふことができようか。

三一五 現實の理由<sup>B</sup>——をかしいことだ！ 私は、錦を着て七八人も従僕をつれた人にはそんなけいをは

らはうとするのだが、それを人々は好まないのだ。だつて！ もし私がその人に敬意を示さないならその人は私をむちでうつことだらう。その人の著てる物、それは力なのである。

りつばに馬具をつけた馬がさうでない馬とくらべられるときも全く同様である！ モンテーニユはそこにどんな相違があるかを見ようとしなさい、さうして人がそこに相違を見ようとするときそれをふしぎがりそのわけを尋ねる、たわけたことに。モンテーニユはかういふ「まつたくどういふわけで……」

人々の健全なる意見

三一六 著飾<sup>きかざ</sup>することは、そんなにむなしいことではない、なぜなら著飾<sup>きかざ</sup>することは、大そう多くの人々が自分のために働いてくれていることを示すことになる。髪の毛のやうすによつて小間使ひや香料つくりやそのほかさういふ者をかかへてゐることを示すことになり、胸飾りや糸や飾り珠<sup>たま</sup>によつては……。さて、人手を多く持つことは單なる見せかけでもなく單なる飾りでもない。人手が多いほど強い。著飾<sup>きかざ</sup>することはその人の力を示すことである。

三一七 尊敬といふことは「きうくつな思ひをしたまへ！」といふことである。外見上はつまらぬことだがしかしなかなかもつともなことである。だつて\*それはつぎのやうな意味のものである。「私だつて、君が必要だといはれるなら、いつでもきうくつな思ひをしますよ、だつて君のためにどう役に立つわけでもないときでさへ私はじつさいきうくつな思ひをしてゐるのだから」——なほまた尊敬は偉い人々を區別



しようとするときのためにある。ところで\*もし安樂椅子に坐ることが相手に尊敬を示すことになるのなら人は誰をでも尊敬するだらう、さうして區別をしないだらう、がきうくつな思ひをさせられるといふことになると、人はなかなかよく區別をする。

三二七ノ二 つまらぬこと。尊敬とは、きうくつな思ひをたまへ、といふことである。

三二八 あの人には四人の従僕がある。

三二九 人を區別するのにその人の内面の性質によつてでなく外面によつて區別するといふことは何といふもつともなことであらう！ 我々二人のうちどちらが先きへ通るべきか。どちらが相手に座をゆづるべきか。有能でない人のほうが。ところが私も相手も同じやうに有能である。そのことでお互ひに争ふほかはなくなる。相手には四人の従僕がある。私には一人しかるない、これははつきりしてゐる、かぞへさへすればよい。ゆづるのは私だ。もし私が相手と口論するとしたら私はばかである。見よ、さやうにして我のあひだは事なくてすむ。これはこの上もなく大きな仕合せである。<sup>(一)</sup>

(一) この文言の素性はポールロワイヤル版二九ノ四一。

三三〇 船長に旅客のうち最も家柄のよい人をえらびはしない。

三三〇ノ二 世にも最も不合理なことが人間の無法のゆゑに最も正しいことになる。國家を治めるのに女王の長男を選ぶといふことほど不道理なことがあらうか。船長に旅客のうち最も家柄のよい人をえらびはしない。さやうな法律は笑ふべきものであり不正なものである。だが人々は現にさうでありまたこれからもつねにさうであるであらうがゆゑにこの法律は道理ある正しいものとなつてゐる、なぜなら最も徳のある最も有能なる人物をいつたい誰がえらぶか。我々のあひだはたちまち争ひだ、めいめいが自分こそその最も徳のある最も有能なる人物であると主張する。だからさやうな性質を何かぎろんのよちのないものへ結びつけることにしよう。王の長男といふことにしよう、これははつきりしてゐる、これにはろんぎのよちがない。理性のなしうるこれが一ばんよい仕方である、なぜといつて内亂はこの上もなく大きなわざはひである。<sup>(二)</sup>

(一) この断章は Portefeuille Vallant, t. VI

三三一 子供たちはおどろきあやしんでその仲間たちのそんけいされるのを眺める。

三三二 貴族といふものは大そう得なものだ、十八歳になるともう成功の路がひらかれ、人に知られそんけいされる、ほかの者なら五十歳でそんなふうになれるのだらうが。苦もなく三十歳を備けてゐる。



三二三 私とは何であらうか。

ある人が通行人を見るために窓によつてゐる、私がそこを通るとする、さうしたら、その人は私を見るために窓によつたのである、と私はいふことができるであらうか。できない、なぜといつてその人は特に私のことをおもつてゐるわけではないのであるから。しかしある人が誰か或る者をその美しさのゆゑに愛するとしたら、その人はこの者を愛するのであるか。いな。なぜなら、天然痘がこの者を殺さずこの者の美を殺すならば、その人はもうこの者を愛さなくなるであらう。

もし人が私を、私の判断力のゆゑに、私の記憶力のゆゑに、愛するとしたら、人は私を愛するのであらうか、この私を。いな。なぜなら私は、私\*自身\*を失はずにさういふ特性を失ふことはありうる。するとこの私は、體のうちにもなく魂のうちにもないとするならば、一たいどこにあるのであらうか。さうしてまた、失せ去るものであるからには私といふものを拵へてゐるのではないところのさういふ特性のゆゑにでなくて、どうして體を或は魂を愛しうるのであらうか。人の魂の實體を——そこにいかなる特性があらうとも——抽象的に愛するといふことにでもなるのであらうか。さういふことはありえないことである。また正しくないことであらう。さればひとは決して人を愛しない、ただ特性を愛するだけである。

従つて職や役のゆゑにそんけいされる人々をけいべつしないやうにしよう、なぜなら人は借りものの特性のゆゑにのみ愛せられるのである。

三二四 民衆は大そう健全な意見を持つてゐる、たとへば、

一、詩よりは慰戯や狩をえらんだこと。生ま半可の學者たちは民衆を笑ふ、さうしてそこに世人の狂氣を指摘して得意になる、がこの學者たちの見抜いてゐない一つの理由によつて民衆は正しい。

二、人を、氣品とか富とかさういふ外面的なものによつて區別したこと。かの人々はまた、これがいかにも不合理なことであるかを指摘して得意になる、がさういふ區別は大いに正しいことである、\*食人種は子供の王様を笑ふ\*

三、なぐられたために怒ること、あるひはひじやうに名譽をのぞむこと。だがさういふことも、それに關聯してゐるほかの必要な得のゆゑに、大いに好ましいことである。さうしてなぐられても怨みにおもはないやうな人間は、悪口や、必ず起る色々なことのために、惱まされる。

四、不確かなことのために活動すること。航海に出たり、板の上をわたつたり。

三二五 モンテーニユはまちがつてゐる。習慣といふものにはそれが習慣だからといふ理由でのみ従ふべきであり、習慣が合理的だからとか正しいからとかいふ理由で従ふべきではない。ところが民衆はただもう習慣が正しいとおもふからといふ理由で習慣に従つてゐる。正しいとおもはないといくら習慣でももう従はうとしない、おもふに民衆は道理か正義か正義かにしか服従することを好まないからである。習慣は、さういふものを持たないと、暴君的なもののやうにうけとられることがあるかもしれない、がしかし理性や正義の支配力だとして、快樂の支配力にくらべてそれより暴君的でないとはいひえない。これらは人間にとつて自然的なる法則なのである。



だから法律や習慣に、それらがきまりだからといふ理由で、従ふのはよいことである。また、眞のさうして正しいきまりを取り入れようとおもつてもそんなものはないといふこと、さういふことは我々には何も分つてをらないといふことを知り、さやうにして、ただもう慣例に従ひさへすればよいのだといふことを知るのはいいことである。さやうにすれば人は決して法律習慣をすてることがないであらう。ところが民衆はこの教説をうけいれようとしなない。さうして民衆は、眞理を見出されうるはずのものと信じてる、眞理は法律と習慣とのうちにあると信じてゐるがゆゑに、これらの法律と習慣とを信ずるのである、さうしてこれらのものの古さをば（眞理をもたぬこれらのもの\*ただ一つの\*權威の證據としてではなく）これらのものの眞理であるといふことの證據として取るのである。そんなふうにして民衆はこれらに従つてゐる、しかし、一とたびそれら法律や習慣が價值のないものと分るとたちまち、民衆はすぐに反抗してくるかたむきを持つてゐる。このことはある一面から見ると、あらゆることについて現はれうることである。

不正

三二六 法律は正しいものではないと民衆につけることは危険なことである、なぜなら民衆はただもう法律を正しいものと信じてのみ法律に従つてゐるのであるから。従つて、さうつけると同時につぎのやうにもいつてやる必要がある、法律にはそれが法律だからといふ理由で従はなければならない、ちやうど目上の者に従ふのにその人が正しいからではなくその人が目上の人だからといふ理由で従ふのと同じやうにと。かうして、もし民衆にこのことを分らせ、正しいといふことの定義はまさにこのやうなものであるといふことを分らせることができるならば、見よ、いかなる反らんもふせぐことができる。

三二七 世間はものごとを正しく判断する、なぜといふのに世人は人間のほんたうの座席であるところの自然的なる無智のうちにあるからである。知識には二つの極がありこれらの極は互ひにふれあつてゐる。第一の極は、すべての人がその誕生においてあるところのまったく自然的なる無智であり、もう一つの極は大いなる精神の人々が到達するところの無知である、この大いなる精神の人々は、人間の知りうるあらゆることを経たのち、自分は何ごとをも知らぬといふことを知り、ほかでもない出發したときのその無知のうちに戻るのである、しかしながらこれは自分を知つてゐるところのすぐれたる無知である。この二者のあひだにゐて、あの自然的なる無知から出てはゐるがもう一つの無知には到達することのできなかつたところの人々は、この自己満足の知識にそまつて、ものの分つたふりをする。さういふ人々が世間をかまにこす、さうして萬事にまちがつた判断をする。民衆と賢者とが世間の歩みを成り立たせてゐるわけであるが、半可通のさういふ人々はこの歩みをけいべつする、さうしてけいべつされる。さういふ人々はあらゆることにまちがつた判断をする、さうして世間はこの人々に正しい判断をする。

現實の理由

三二八 正から反への絶えざる轉換。



かうして我々は、人間といふものはすこしも大切でないことをするといふ見方から、人間といふものはむなしなものだといふことをのべた。さうしてすべてさういふ意見はうちこはされてしまふ。つぎに我々は、すべてさういふ意見がきはめて健全なものであること、またさやうにして、さういふむなしなものも大さうりつばな根據を持つたものであるから、民衆は人のいふほどにはむなしものでないといふことをのべた。さやうにして我々は民衆の意見をうちこはしたところの意見を、うちこはした。

しかし今はこの最後の命題をうちこはさなければならぬ、さうして民衆といふものはいくらその意見は健全であつてもむなしものである、といふことはやはりほんたうであるといふことを、のべなければならぬ。なぜなら民衆は眞理をその在るところにとらへないからであり、眞理をそのないところに置く結果その意見がいつも大さうあやまつてをり大さう不健全であるからである。

#### 現實の理由

三二九 人間のよわさはひとのつくりなすかくも多くの美の原因である。たとへばリュットを上手にひくことができるといふことのやうに。

それはただ我々のよわさにもとづいてゐるかぎりにおいて憂ふべきことからである。<sup>B(1)</sup>

(一) ひととは慣習に従つて多くの美をつくりなす。たとへば絃樂器<sup>リュット</sup>を上手にひくといふやうに。絃樂器<sup>リュット</sup>を上手にひくことは、世人にとつてはけつかうなことであるが、人間のよわさにもとづいてゐることをおもふとき、憂ふべきことからである。

三三〇 王の権力はその根柢を民衆の理性と愚昧との上にもつてゐる。どちらかといへばすつと愚昧の上にもつてゐる。この世の最も大きな重要なものはその根柢としてよわさをもつてゐるのである。ところでこの根柢はすばらしく堅固である、なぜなら民衆がよわいといふこと、このことほど「確實な」ものはない。健全な理性の上に根柢をもつものは、たとへば智者の鑑識のやうなものは、まづいところに根柢をもつてゐる。

三三一 我々はただプラトンやアリストテレスを教育者のきるゆつたりした服装においてのみ想像する。この人々だつて、友人たちに對していいいであつたし、またほかの人々と同じやうに笑顔をもつて接したのである、さうして『法律學』や『政治學』をかうして楽しんでゐるときには、それを遊びながらやつたのである。それはこの人々の生涯のうちいちばん哲人的でなくいちばん重大でない時期であつた。最も哲人的であつた時期はあつさりと靜かに生きてゐるときである。もしこの人々が政治についてかいたとするならそれはまづ氣違ひ病院を整頓するためのやうなものであつたし、またもしこの人々がまるで重要事についてでも語るやうなやうすを見せたとするならそれは語りかける相手の氣違ひどもがおのれを王か皇帝でもあるやうに考へてゐることをこの人々は知つてゐたからである。この人々は氣違ひどもの狂氣をできるだけよくやはらげようとして行き方を共にしたのである。



三三二 \* 暴政は、自己の世界をこえて、一切のものを支配しようとのぞむことにおいて成り立つ \*

強いもの、\* 美しいもの\*、よい心のもの、信心ぶかいもの、いろいろのものの部處があり、おのおのは他の部處をでなく自分みづからの部處を治めてゐる。ところが時としてこれらのものは衝突する、さうして強いものと美しいものとは、どちらが相手の支配者となるべきかについて争ふ、おろかなこと。なぜならこれらのものもつ支配權はそれぞれ種類のちがつたものである。\* これらのものは理解しあふことがない、さうしてこれらのものあやまりはいたるところを支配しようとのぞむことにある。そんなことは何者にもできることではない、力だつてでははしない、力は學者の國においてはなにごとでもできないのである。力が支配力をふるふのはただ外面的行爲についてだけである \*

さうであるからつぎのやうな文句はあやまりであり\* 暴君的である\*。「私は美しい、だから私は人をおれしめるはずである」「私は強い、だから私は人に愛せられるはずである」「私は……」

暴政とは、ある一つの道によつてしかえられないものを、それとは別の道によつてえようとするものである。我々はそれぞれちがつた價値に對してちがつた義務をあたへる、すなはち快適には愛の義務を、力にはおそれの義務を、\* 知識には信用の義務を\*

我々はそれらのものをあたへるべきである、それらのものを拒むのは不正であり、\* 別のものを求めるのも不正である\*

つぎのやうにいふのもまたあやまりであり暴君的である。「彼は強くない、だから私は彼をそんけいしない。彼は有能でない、だから私は彼をおそれない」

三三三 君はこんな人々に、あつたことはないか、君から一向敬意を示されないのを不平におもひ、自分をそんけいしてくれる身分の高い人々をかぞへたてる人々に。さういふとき私ならかう答へるであらう、「さういふ人々を感服せしめたあなたの値打を私に見せていただきたい、さうしたら私もあなたをそんけいしよう」

現實の理由

三三四 邪欲と力が我々のあらゆる行爲のもとである。邪欲は意志による行爲を、力は意志によらぬ行爲をおこなふ。

現實の理由

三三五 世人はすべて幻覺の中にある\*といふことは従つて本當である\*。なぜなら民衆の意見そのものは健全であつてもその意見は民衆の頭の中では健全ではないのである、なぜといふのに民衆は眞理を、それのないところに、在ると考へてゐる。眞理は彼らの意見の中にありはする、が彼らのおもつてゐる點にはないのである。なるほど貴族はそんけいせらるべきである、がそれは生れが現實の利點であるからとか



あるひはさういふふうな理由からではない。

現實の理由

三三六 背後の思想をもたなければならぬ、さうしてこれによつて萬事を判断しなければならぬ。民衆と同じやうにして語りながらも<sup>(一)</sup>。

(一) シャロン『ちゑ』二ノ二「私は人がほかの連中や民衆と同じやうに生活し談話し行爲することをのぞむが民衆と同じやうに判断することはのぞまない、どころか民衆を批判することをのぞむ」

現實の理由

三三七 段階。民衆は生れの高い人々をやまふ。なま半可の識者は生れの高い人々をけいべつし、生れはその人間の利點ではなくて偶然の利得であるなどといふ。識者は生れの高い人々をやまふがそれは民衆の思想によつて\*ではなく\*背後の思想による。知よりもさらに多く熱をもつ信心家は、識者をして\*生れの高い人々を\*尊敬せしめる理由に頓著せず、生れの高い人々をけいべつする、なぜなら信心家はその信仰心の\*あたへる\*一つの新しい光で人を判断するからである。しかし完全なるキリスト信者は生れの高い人々をもう一つ別のすぐれた光でそんけいする。かうして人が光をもつにおうじ、人の意見は正から反へとつづきあひながら進む。

三三八 まことのキリスト信者はしかし\*狂氣に\*従ふ。狂氣をそんけいするからではない。人間を罰するため人間をこの狂氣に服従せしめたまへる神のさだめをそんけいするからである。 *Omnis creatura subjecta est vanitati. Liberabitur.* \*そこで聖トマスはヤコブ書の中にある富める者を偏り遇すといふ<sup>(一)</sup>くだりを説明してかういつてゐる、もし彼らが神の眼の前で狂氣に服しないなら、彼らは宗教の掟から外れるものである\*。

(一) ロマ書八ノ二〇―二一「造られたるものの虚無に服せしは、己が願ひによるにあらず、服せしめたまひし者によるなり。されどなほ造られたる者にも滅びの僕たる状より解かれて神の子らの光榮の自由に入る望みはのこれり」パスカルのいふ愚か・狂氣 *folie* は聖書のこの場所では虚無 *vanitas* となつてゐる (二) ヤコブ書二ノ一「わが兄弟よ、榮光の主なる我らの主イエス・キリストに對する信仰を保たんには、人を偏り見るな」人はひとしく虚無に服すべきである。富める者を重んじ見て上席につけ、貧しき者をかるんじて下座に追ふがごときをするな。汝らのうちに區別をなし、惡しき思ひをもてる裁き人となつてはならぬ。



三三九 私は手もなく足もなく頭もない人間を考へることができ、なぜなら頭は足より必要であるといふことを我々に教へてくれるものは経験にすぎない。しかし私は思考を持たぬ人間を考へることはできない。それは石か獣であらう。<sup>(一)</sup>

(一) ボール・ロワイヤル版は附加へて「それゆゑ人間の存在を成り立たせるものは思想であり、これなくして人間を考へることはできない」

三三九ノ二 我々においてよろこびを感じるものは何であらうか。手か。腕か。肉か。血か。それはなにか物質的でないものであるにちがひないことは分る。

三四〇 計算器は動物のするどんなことよりも思考に近い効果を示す、がしかし、これは動物のやうに意志をもつてゐる、といはしめるやうなことを何一つしない。

三四一 リアクトールのかますと蛙の話。<sup>(二)</sup> これらのものはいつもそれをする、さうして決してちがつたふ



うにはしない、またべつだん精神によるやうなことがらをしない。

(一) モラヴィアなるオルムツの司教 Jean Skala がその論文 *Elegans spectaculum ranae ulciscens Lucii violentiam* (かますの暴行に對する蛙のふくしみのすばらしい光景) 中に語るところによればオルムツ近傍の養魚池でかますと蛙とがはげしくたたかひ蛙はかますの眼を舂ぐりつつたといふ。リアンクール公がおそらくこの話をパスカルにつたへた。

三四二 もし動物が、狩りのときに、或はまた餌食が見つかったとか無くなつたとかいふことを仲間告げるときに、本能でそのことを精神でするとし、また、本能で語るところを精神で語るとするならば、もつと情意的な事柄のときにもまた語るであらうのに。たとへばつぎのやうなときに。「この繩は私をいめたつける、私はそれにとどかない、それをかみきつてほしい」

三四三 鸚鵡は、よごれてゐないのに嘴を拭ふ。

三四四 本能と理性、二つの本性のしるし。

三四五 理性は主人よりもすつときびしく我々に命する、なぜなら一に従はぬ者は不幸であり他に従はぬ者はおろかである。

三四六 考へるといふことに人間の偉大なところがある。

三四七 H3<sup>(二)</sup> 人間は自然のうちで最もよわい一本の葦にすぎない。しかしそれは考へる葦である。これをおしつづすには宇宙全體が武装する必要はない。一つの蒸氣<sup>B</sup>、一つの水滴もこれを殺すのに十分である。しかし宇宙がこれをおしつづすとしてもそのとき人間は人間を殺すところのこのものよりも崇高であらう、なぜなら人間は自分の死ぬことをそれから宇宙の自分よりすつとたちまさつてゐることを知つてゐるからである。宇宙は何も知らない。

だから我々のあらゆる尊嚴は考へるといふことにある。我々が立ち上らなければならぬのはそこからであつて、我々の満たすことのできないところの空間や時間からではない。だからよく考へることを努めよう。ここに道徳の原理がある。

(一) H3この符號はあとからつけたもので人間 (Homme) の項第三章とか第三節とかいふ意味のものであらう。

#### 考へる葦

三四八 私は私の尊嚴を空間によつてではなく、私の思惟\*の規則\*によつて求むべきである。私は領土のかずかずを所有したとしてもただそれだけのことであらう。\*空間によつて\*宇宙は私を一點であるかのやうに包み吞む。思惟によつて私は宇宙を包容する。



三四九 激情を制御した哲人たち。いかなる物質がそれをなしたのであらうか。

ストア派の人々

三五〇 彼らは結論していふ、人は、をりをりすることができ、事ならつねにすることができると、また名譽欲はこの欲をもつ人々をして物事をりつばにおこなはしめるのであるからには、ほかの人々だとしてその物事を同じやうにりつばにおこなふことができるはずであると。

これらのことは健康の眞似ることのできない熱をおびた動きである。

エピクテトスは、つねに變らざるキリスト教徒のゐることから結論して、誰でもさうなることができるといつた。

三五一 精神のあのひじやうな努力、ここは魂の時としてとどくところではあるけれども、とどまつてゐられるところではない。魂はここにただとびつくだけであり、王座にでもつくやうにしていつまでもといふのではなく、ただほんの一瞬間とどいてゐるだけのことである。

三五二 徳のなしうることがらはその人の努力によつてでなくその人の日常によつて量<sup>はか</sup>られなければならぬ。

三五三 勇猛といふやうな一つの徳の並みはづれたものをもつてゐても、もしそれが同時にそれと反對の徳を伴つてゐないなら、私はそれを嘆稱しない、たとへばエパミノンドスを見るとこの人は並みはづれた勇猛と並みはづれたやさしさとをもつてゐた。おもふに、さうでないなら、それは向上といふよりは低下だ。一つ並みはづれてゐるとして偉大さを示すことにはならない、反つて、二つのものに同時にとどいてゐる二つのあひだを十分に満してゐてこそ、偉大さを示すことになる。しかしおそらくそれは、魂がそれらの端から端へ急速にうごくのにほかならず、ちやうど火のついた薪「をふりまはすとき」のやうに魂はじつさいはただ一點にあるのにすぎないのであらう。さうでもかまはない。だつて魂のひろさは示されないにしてもすくなくとも魂の速さは示される。

三五四 人間の本性はただ進んでゆくばかりではない、進んだり退いたりする。

熱病は寒けのすることもありあつこともある。そして寒けのするのはあついと同樣に熱の高いしるしである。

時代から時代への人間の發明も同様にして進む。おほよそ世人の善意や悪意もまた同様である。

\* *Plerumque gratæ principibus vices.* \*



(一) モンテーニュ(一ノ四二)によるホラティウス Odes, III, XXIX, V, 13 の引用。ただし divitibus を principibus としてゐる。「變化は大ていのはあひ高貴の人によるこばれる」

三五五 \* 雄辯もつづく退屈である\*

高貴の人々や王はをりをり遊ぶ。いつも王座にゐるのではない。王座にゐては退屈するのである。偉大さはそれを感じるためにはそこを離れてみる必要がある。何事でもつづくといふのは不快なものだ\* 寒さはぬくもらうとするのには氣持のよいものである\*

自然は itus et reditus (往きと戻り) による進みでうごく。行く、戻る、つぎにさらに遠くへゆく、つぎに二倍ほど戻る、「つぎに」前よりよけい進むといふふうだ。W  
海の揚潮あはれもそんなふうにする。太陽もこんなふうによくやうにおもはれる。

~~~~~

三五六 からだの榮養はすこしづつとるものだ。榮養をたくさんとつたとてわづかしか實みにならない。

三五七 徳を双方のがはに極端にまで追求してゆかうとするともろもろの不徳が小さな無限のはうへ人知れぬ路をとほつて知らぬうちにしのびこむ。また大きな無限のはうへもたくさん現はれる。その結果人は

不徳のうちに迷ひ入り徳は見えなくなる。<sup>(二)</sup> \* 完全といふことに對してはどう身動きしやうもない\*

(一) ここにいはれてゐる小さな無限大きな無限とはどういふ意味かよく分らない。徳をあまりげんみつにおこなはうとすると例へば個性的なものの拘束をおこしあまりひろくおこなはうとすると例へば社會革命のやうなものをおこすにいたるといふことであらうか。

三五八 人間は天使でもなく獣でもない、さうして不幸なことに天使を演じようとする者は獸を演ずる。<sup>(二)</sup>

(一) モンテーニュ三ノ一三「天使に變らないで獸に變る」。なほ Artus Thomas のアポロニウス傳註釋中にこんなことばがある「ソクラテスは考へた、天使にならうとして結局獸になるやうなことになるといけないから人間にまづ必要なことは十分人間になることである」

三五九 我々が徳のうちに身を持してゐるのは、我々自身に力があるからではなくて、ちやうど、互ひに吹きあふ二つの風のあひだに\* 立つて\* ゐるやうに、二つの互ひに反した不徳がその力につりあひを保つてゐるからである。どちらか一つの不徳をとりのぞいてみよ、我々はもう一つの不徳におち入る。<sup>(二)</sup>

(一) ラロシュフワコー『格言』一八二「藥の調合に毒がまじるやうに徳の構成にいろんな不徳がまじる。ちやがそれら(の不徳)を集めそれらを鹽梅あんばいして人生のいろんな災惡に對して有効に用ひる」

三六〇 ストア派の人々のとなへることはじつにむづかしい、またじつにたわいがない!



ストア派の人々はかう主張する。高度の叡知にとどいてゐる人のほかは誰も彼も一やうにおろかであり不徳で\*ある、ちやうど 蹠<sup>くるま</sup>ほどの水の中に落ちた人々と同じやうに。<sup>(二)</sup>

(一) 徳は絶対であり段階は考へられない、従つて徳に達してゐない人は——ちやうど小川へであらうと断崖へであらうと落ちたにはちがひないといひうるのと同じやうに——程度の差別なく一やうに不徳である、さうストア派は主張するとパスカルはいふ。すでにモンテーニュが同じことを批判してゐる。「埒<sup>あち</sup>を百歩越えた人が十歩しか越えない人より悪くないといふのは私には信じられない」(二ノ二)

至高善 至高善についての議論

三六一 Ut sis contentus temetipso et ex te nascentibus bonis.

そこに矛盾がある、なぜなら彼らはつひに自殺することをすすめる。

お、 何といふ幸福な生！ そこから人はあたかもペストからのやうにして脱れるといふ。

(一) 「汝が汝自身でそれから汝から出るところの善で満足するため」(セネカ *Lettres à Lucilius*, XX, 8) パスカルはなほモンテーニュ二ノ三をも回想してゐる、この章でモンテーニュは自殺を辯護したセネカの長い書翰七〇を要約してゐるのである。

三六二 Ex senatus-consultis et plebiscitis……

同様の箇處をたづねよう。

三六三 Ex senatus-consultis et plebiscitis scelera exercentur. Sen., 588.<sup>(一)</sup>

Nihil tam absurde dici potest quod non dicatur ab aliquo philosophorum. Divin.<sup>(二)</sup>

Quibusdam destinatis sententiis consecrati quæ non probant coguntur defendere. Cic.<sup>(三)</sup>

Ut omnium rerum sic litterarum quoque intemperantia laboramus. Senec.<sup>(四)</sup>

Id maxime quemque decet, quod est cujusque suum maxime. Senec. 588.<sup>(五)</sup>

Hos natura modos primum dedit. Georg.<sup>(六)</sup>

Paucis opus est litteris ad bonam mentem.<sup>(七)</sup>

Si quando turpe non sit, tamen non est non turpe quum id a multitudine laudetur.<sup>(八)</sup>

Mihi sic usus est, tibi ut opus est facto, fac. Ter.<sup>(九)</sup>

(一) 「元老院と人民投票とによつて罪は成しとげられる」セネカ *Lettres à Lucilius*, XV. モンテーニュ三ノ一。一六五二年版エッセー五八八頁。(二) 「誰か哲學者が語りなかつたほどにばかげたものは何ものも語られえない」キタロ *De Divinatione*, II, 58. 語りうるほどのいかなるばかげたものもすでに誰かしらの哲學者が語つてゐる。「哲學はじつて多くの容貌と變化とをもつてをりじつに多くのことを語つてゐるから我々のいかなる夢想もそこに見出される。そこけないところのいかなるものをも人間の空想はいだくことはできない。善においても悪においても」(モンテーニュ二ノ二) (三) 「彼らは或る決定した意見に身をささげてゐて、彼らの承認しないことがらを擁護しようしひられる」*Tusculanes*, II, 2. モンテーニュ二ノ二。(四) 我はあらゆるものの過度になやまされるものだ、さやうにして文藝の過度になやまされる」セネカ・書翰一〇六。モンテーニュ三ノ一二。(五) 「殊に各人の特有なるものが殊に各人に似合はしい」キタロ *De officiis*,



I, 31, 113. モンテニユ三ノ一。(六)「自然は彼らにまづこれらの制限をあたへた」ウエルギリウス Geor-  
gica, II, 20. モンテニユ一ノ三〇。(七)「よき頭脳は多くの知育を要しない」セネカ・書翰一〇六。モン  
テニユ三ノ二。(八)「恥づべきでない事柄もそれが多数の人々にほめられると恥づべき事柄になりはじ  
める」キタロ De Finibus, II, 15. モンテニユ二ノ一六。(九)「これが私のやり方だ。汝は汝のすきなや  
うでやるがよろ」テラントヤサハ Heautont, acte I, sc. I, v. 21. モンテニユ一ノ二七。

三六四 Rarum est enim ut satis se quisque vereatur.<sup>(1)</sup>

Tot circa unum caput tumultuantes deos.<sup>(1)</sup>

Nihil turpius quam cognitioni assertionem praecurrere. Cic.<sup>(1)</sup>

Nec me pudeat, ut istos, fateri nescire quid nesciam.<sup>(2)</sup>

Melius non incipient.<sup>(5)</sup>

(一)「各人が自己を十分に畏敬することは稀であるから」クインティリアヌス X, 7. モンテニユ一ノ三八。

(二)「かくも多くの神々がただ一つの顔のまはりにならざらざら」セネカ Marcus Annaeus Seneca, Susoria-  
rum liber, I, 4. モンテニユ二ノ一三。(三)「知るまゝに確言することほど恥づべきことはな」キタロ  
Academiae, I, XIII, 45. モンテニユ三ノ一三。(四)「また私はその人々のやうに、知らないことを知らな  
いと告白するのを恥づかしうとおもはな」キタロ Tusc. I, 25, 60. モンテニユ三ノ一。(五)「中止  
するより」始めないであるはうが容易である」セネカ・書翰七二。モンテニユ三ノ一〇。

### 思 考

三六五 \* 人間のたふとさはまったく思考のうちにある。しかしこの思考とは何であらうか。何とそれは  
おろかなものであらう【!】\*

\* 一たい\* 思考はその本性からいへば驚嘆すべきものであり、また無比のものである。思考がもし輕蔑  
せられたとしたら並みはづれた缺陷がそこにあつたのに違ひない。じつさい思考はもうこれほど笑ふべき  
ものはほかにないといふほどの缺陷を持つてゐるのである。思考はその本性からいへば何と大きなもので  
あらう! その缺陷からいへば何と低劣なものであらう!

三六六 この世の最高の裁判をおこなふ人の精神も、あたりでさわぎがおこなはれてもすぐには掻きみだ  
されはしないといふほどに悠然としてゐられるものではない。彼の思考をさまたけようとするには大砲の  
音はいらぬ、ほんの風見の音が滑車の音でよい。彼が今よく考をこぼすことができなうとしてもあやし  
んではならぬ、一匹の蠅が耳もとでうなつてゐるのだ。正しい決断がつかなくなるのにはそれだけで十分  
である。もし彼をして眞理を見出させようと君がのぞむなら、彼の理性をさまたけるところのさうしても  
ろもろの都ともろもろの國の支配者なるこの強い知力をかきみだすところの、この動物を追拂ふがよい。

\* 見よ! の笑ふべき神! O ridicolissimo eroe!<sup>(1)</sup>

(一) アルノー派の博士らがソルボームを追はれエクススの高等法院が死刑執行人をして第十七ブローヴァンシア  
ルを焼却せしめたころのこと一日グランゾーギユスタンの門にスカラムッシュに獻じられたイタリヤ語の書簡



が貼り出されこのさわざ「このスコラの争ひ」が一場の喜劇にほかならぬことを笑つたその中にこんなことばがあつたといふ。お、うとも笑ふべき花形！ Cf. Souriau, Les Pensées catholiques de Pascal, Paris, Spes, 1935, p. 10.

218

三六七 蠅の力。蠅はたたかひに勝ち、我々の心のはたらきをさまたけ、我々の體を食ふ。

三六八 人が熱は或る球状分子の運動にほかならないといひまた光は我々の感ずる *conatus recedendi* [遠心力] にほかならないといふとそれを我々は意外におもふ。おや！ 快感は精氣の躍動にほかならないといはれるのであるか、と。我々は右のやうなかずかずの感覺についてするぶんちがつた考へをいだいてゐた！ さういふ感覺は、さういふ感覺とは別の感覺とくらべて——どう變つたところもないのに——我我には大そうかけはなれたもののやうにおもはれるのだ！ 火の感じ、それから、觸覺とはまるきりちがふ仕方で我々をおそふあの熱さ、それからまたあの音や光の感じ、さういふものはすべて我々には神祕なものやうにおもはれるのだ、がしかしそれは石で打たれることと同じやうに平明なことなのである。なるほど毛孔へはひる微小な精氣がほかの神経にふれるといふことはそれは事實である、がしかし神経にふれるといふことには變りはない。

三六九 記憶は理性のあらゆる働きにとつて必要である。

三七〇 「偶然が想念をあたへ偶然が想念をとりのごく。保持するすべもなく獲得するすべもない」

「想念はうせてしまつてゐる。私はそれをしるしたいとおもつた。そこで私はその想念をしるすがはりに、それはうせてしまつたとするす」

「枝葉のろんぎ。こまかな表現、それはふさはしい」

「あなたは私をいこはせて下さるか。教父たちおよび……」

「私はそれからそれを寫し取つた。といふのはそれまでにそれを……置いておかなかつたのだ」

三七一 「私は幼なかつたころ私の本をいだきしめたものだ、さうして……ことがをりあつたので、いだきしめたとおもひながら疑念をもつのであつた」

三七二 考へを書きしるしてゐるとその考がをりをり逃けてしまふことがある、がこのことのおかげで私は、私のいつも忘れてゐるところの私といふものたよりのなさをおもひ出すことができる。これは私のおもひ出すことのできなくなつた考へと同じやうに私にとつて教訓的である、なぜなら私はたゞもう私といふもののむなしさを知らうとのみおもつてゐるのである。

219



三七三 私はこの私の思想を書きつけてゆかう、それは順序次第をもたぬであらう、がしかしうつかりごたごたさせてしまふといふつもりもおそらくはない。これが眞の順序といふものなのだ。さうしてこれが、ほかでもないその無秩序によつて私の目的を絶えず指し示してゐてくれることであらう。もし私が私の主題を秩序たたくとりあつかふとしたら私は私の主題にありがためいわくをあたへることにならう、なぜといつて私はそもそも私の主題がさういふ秩序をもちえないといふことをしめしたのである。<sup>(一)</sup>

(一) モンテーニュ三ノ五「我々の生は半分は狂氣半分は知慧である。ただもうかしこまつてきちやうめんじのみ書く人は半分以上をとりおとしてゐる」

三七四 私のなによりも意外におもふことは世間の人誰一人自分といふものの缺陷をあやしまないといふことである。みんなきまじめに行動してゐる、さうしてそれぞれその境遇に従つてゐる、それも\*さういふぐあひにして従つてゐるのがじつさいよいことなのであるからといふ理由によつて従つてゐるのではなく\*あたかも道理や正義がどこにあるかそのありどころをいかにも確實に心得てゐるかのやうにして従つてゐるのである。そこで彼らはしよつちゆう案外な目にあふ、ところが彼らは笑ふべきけんそんなもつてそれを自分のあやまりなのだとおもふ、さうして自分が心得てゐることをつねに誇りとしてゐるところの腕前のおやまりだとはおもはないのである。がしかし世間にさういふ人々つまりピュロン〔ギリシア最初の懷疑論者〕の徒でない人々がおほせいで、だいたい人間といふものはあの本來的にしてさげがたい缺陷のうち

になどゐるものではないと信する能力をもつてゐるのでありそれどころかむしろ本來的なるちゑのうちにあるのだと\*信する\*能力をもつてゐるのであるからには、どんな途方もない考へだつていただくことはできるものだといふことを明示してくれるのは、反つてピュロニスムの名譽のためにけつかうなことであらう。

ピュロンの徒でない人々があるといふことほどにピュロニスムに力をあたへるものはない、だつて、誰もかれもみんなピュロンの徒であるとしたらピュロニスムはあやまりとなつてしまふことにならう。

三七五 「私は私の生涯の長いあひだ、正義はあるとおもつてすごしてきた、さうしてその點では私はあやまつてゐなかつた、なぜといつて神が我々に正義をあきらかにしめさうとのぞみたまうたのにおうじて正義はあるのだから。しかし私はそのことをさういふふうには考へなかつたものだからその點で私はあやまつてゐた、といふのは私はかうおもつてゐたのである、正義といふものは本來的に正しいものである\*また正義を知り正義を判断するのに十分な力を自分はそなへてゐると\*しかし幾度びとなく正しい判断をしそこなふにおよんで、つひに私は私を、つぎにはほかの人々を疑ふやうになつた。私はあらゆる國々あらゆる人々のうつりかはるのを見た、かうして私は眞の正義とはいかなるものかについて幾度びとなく考へをかへたのち、私達の自然がふだんの變化にほかならぬことを知つた、さうしてそれ以來私はもう變はることがなかつた、變はるとしたら意見が強くなるばかりであらう」



三七六 この學派はその味方によつてよりもその敵によつて強められる、なぜといふのに人間のよわさはこれを知つてゐる人々よりもこれを知らぬ人々に一そうよくあらはれる。<sup>(一)</sup>

(一) モンテーニュ二ノ一二に「自分を知り自分を評し自分を咎めるところの無知はまつたき無知ではない、まつたき無知であるためには自分自身を知らぬのでなければならぬ」。自分自身を知らぬ者ほどまわいものはない。ピュロンの懷疑論はかくて、人間のよわさを説く彼の味方によつてよりも、反つて、人間のよわさを知らぬ敵によつて、強めてもらふこととなる。

三七七 けんそんについての談話は高ぶれる者には高慢のたねになりへりくだれる者にはけんそんのたねになる。そのやうにしてまたピュロニスムについての談話は肯定者には肯定のたねになる、けんきよのことをつつましく語る者はすくない。純潔のことをきよらかに語る者はすくない。ピュロニスムのことを懷疑的に語る者はすくない。我々は嘘、かけひなた、むじゆんであるにすぎない。我々は我々自身にむかつて自分を隠し自分を假装する。

ピュロニスム

三七八 理性の極端なものは理性の極度の缺乏とおなじやうに狂氣としてひなんされる。中位のところだ

けがよい。おぼせいの人々がさういふことに決めたのである、さうしてこの人々は、どちらの端からにせよ端からはづれ出る者を誰をでも咎め立てる。

私はこのことに對しかたくなことをいふまい。私は私がそこにあるやうにしむけられることにさんせいであり、下の端にあるのを拒まれることにさんせいである、それが低いところであるからといふ理由ではなくそれが極端であるからといふ理由で。なぜなら私は同様にして高いところにあるやうにしむけられることをもまたいやがるにちがひないのだから。

中間をはづれることは人間性をはづれることである。

人間の魂の偉大さは中間にとどまることを知るにある。偉大さはそこからはずれ出ることにあるどころか反つてそこからすこしもはずれ出ぬことにある。

三七九 あまり自由でありすぎるのはよくない。必要な物を何でももつてゐるのはよくない。

三八〇 世の中にある格言はけつかうなものばかりである。人はただそれらを適用するのにあやまるだけである。

たとへば——公けの善のためには生命をかけなければならぬことを人は疑はない、また幾人かの人々はそれをする、しかし宗教のためにはすこしもしない。



人々のあひだに不平等のあることは必要である、これは眞實である、しかしこれが認められるとなると最高の政治にむかつてのみならず最高の暴政にむかつても扉はひらかれる。

心をすこしゆるめることは必要である、しかしそれはこの上もない放埒はたらにむかつて扉をひらく。

その限界をしめしてもらへるといいのだが。

事物のうちには限界といふやうなものはない。\*法律はそれをそこに示さうとする\*しかしながら精神は\*それを\*甘受することができない。

三八一 あまり若すぎると正しい判断をしない、あまり老いててもまた同様である。

考へが不十分であると、<sup>B</sup>あまり考へすぎると、かたくなになり、それに心酔してしまふ。

作品を、つくりあけてすぐに、考察すると、まだまだその作品に對しあらかじめ好意をよせてかかる。

あまりあとになりすぎるともうその作品の中へ立ち入れ(ない)

繪をあまり遠くからまたあまり近くから眺めるときもさうである。これがほんたうの場所だといふただ一つの\*ゆるがぬ\*點があるだけである、ほかの點は近すぎるか、遠すぎるか、高すぎるか、低すぎる。

畫法においては透視法がこの一點を決定する。しかし眞理や道德においては何がこれを決定するのであろうか。

三八二 すべてのものが\*一やうに\*ゆれうごくなら\*ちやうど船中にあるやうなもので、外見上は\*何一つうごかない。すべての人が放埒はたらに向つてゆくならばたれもそこへ向つてゆくやうには見えない。足をとめてゐる人はちやうど一定點のやうにして他の人々の激動をしめしてくれる。

三八三 こんらんのうちにある人々は秩序のうちにある人々に向ひ、\*自然より\*遠ざかりゆくものは君たちであるといひ\*自分たちは自然に従つてゐるとおもつてゐる、ちやうど\*船の中にある人々が、はなれ去るのは岸べにゐる人々であるとおもふやうに。ことばはいづれのがはでもあひひとしい。判定するためには一定點をもつことが必要である。港は船中の人々を船中と判断する、しかし道德においては我々はどこに港をもつのであろうか。

三八四 矛盾といふものはものごとの眞であるかどうかを見分けるにはよくない規準である。

確實なことから矛盾するものは幾らもある。

虚偽のことがらで矛盾なしにとほるものも幾らもある。

矛盾することが虚偽のしるしでもなく矛盾しないことが眞理のしるしでもない。

#### ピュロニスム

三八五 この世においてはものごとはそれぞれその一部分は眞であり一部分は偽である。本質的眞理はさ



うではない、それはまったく純でありまったく真である。この眞理は右の混合によつてけがされ、つきくづされる。まったく純粹であるといふやうなものはない、従つてまったく真といふ意味に理解するならば何ものも真ではない。人はいふかもしれぬ、人殺しが悪いといふことはほんたうであると。さやう、なぜといふのに我々は悪や偽はこれをよく知つてゐるからである。しかし人は何をよいものといふか。純潔をか。私はいないといはう、なぜならこの世界はをはるであらうから。——結婚をか。いな、節欲はさらによい。——殺さないことをか。いな、なぜなら混乱はおそるべきであり、悪人はすべての善人を殺すであらう。——殺すことをか。いな、なぜならそれは自然を破壊する。

我々は眞をも善をも、一部分しか、さうして悪と偽とを混合してしか、持たない。

(一) モンテーニユ二ノ二〇「我々は純粹なものといふものを何も味はない」

三八六 もし我々が毎夜同じことがらを夢にみるならばこのことがらは我々が毎日見るところの事物と同じやうに我々の心をうごかすであらう。もし職人が毎夜十二時間のあひだ自分が王様である夢をたしかに見るとしたならば、この職人は、毎夜十二時間のあひだ自分が職人である夢をみる王様とほとんど同じやうにしあはせてあらうと私はおもふ。

もし我々が毎夜敵に追ひかけられこの厄介なまほろしにせめたてられる夢や\*旅をしてゐるときのやうに雑多の用事のうちに日々を送る\*夢をみるならば、我々は、それがほんたうであるかのやうにして苦し

み、眠りに入ることをおされるであらう、ちやうどじつさいにさういふ不幸にはいつてゆきたくないときに目ざめをおされるやうに。\*まったくそれは現實のときとほとんど同じ苦痛をあたへるであらう\*

しかし夢といふものはそれぞれみんなちがつたものであり、同じ一つの夢でも多種多様であるから、夢において人の見るものは目ざめてゐる人の見るものよりも心をうごかすことがすくない、目ざめてゐる人の見るものは連続的であるからである、しかし連続的だといつてもすこしも變らないといふほどに連続的であるのではなくまた一やうであるのでもなく、たとへば人が旅にあるときのやうに、さほど突然にはなくまたさほど稀にでもなく變化することはするのである。そんなとき人はよく「私は夢をみてるやうな気がする」などといふ。なぜといつて人生は變化のややすくはない夢である。

三八七 「眞の證明があるといふことそれはありうることである、がしかしそれは確實なことではない。従つてそのことからして、一切のものが不確實であるとすることは確實なことではない、といふことが明らかに分る、これはピュロニスムにとつて光榮のことであるが！」

よき感覺

三八八 彼らはよぎなくこんなことをいふ「君には誠實な行動がない。我々は眠らない。など……」と。この高慢な理性のへこまされ哀願的になるのが見たいものだ！ おもふにさやうなことは、自己の権利をひとと争ひそれを武器と技量とを腕にして守るところの人のことばではない。この者はひとに誠實な行



動がないといふことを別段ふざけていつてゐるわけではないが、しかしかの邪念(とよぶもの)を力づくで懲らしめようとしてゐる。

(一) 懐疑論者と抗争する獨斷論者たちをさすものであらう (二) 「私はこの作者(モンテーニュ)のうちに、かの高慢な理性がほかでもない理性それみづからの武器によつて徹底的にいためつけられるのを喜びなくして見ることはできない」(既掲『パスカルとサーシとの對話』)

三八九 神を持たぬ人間はあらゆることに關する無知のうちにある、さけることのできぬ不幸のうちにあることを、傳道書はしめしてゐる。おもふに、のぞみをいだいても叶はないといふことは、不幸なことである。ところで、人間は幸福でありたいとのぞみ、なにらかの眞理を保證してもらひたいとのぞみ、それにもかかはらず、知ることもできず、知らずになるようとのぞむこともできない。うたがふことさへもできない。

(一) 傳道ノ書のうち特に八ノ一七をパスカルは念頭にしてゐるのではなからうか。日の下におこなはれる神のもろもろのわざを見そのことわりを究めようと努めたがどうしても究めることができない、そんな意味のことばがそこにある。

三九〇 「神は世界を責告(せめく)にあはさうとして造りたまうたのであらうか」とか「神はこんなにもよわい人々からさやうにも多くを要求したまふのであるか」とかそのほかさういふことばの何といふおろかなこと!

ピュロニスムはこの疾患に對する藥であり、これらの空なることばをうちくたく。

(一) 合理主義の立場からキリスト教に對して殊にジャンセニスムに對してなされるこのうへもなくはげしい反駁を、ここにパスカルは問題としてゐる。神は、救はれるための必要なる力をあたへることを拒んでゐながらかやうにも多くの被造物を責め苦にあはしてそれで正しいのであるか、神はかやうにもよわい人間に不釣合ひな義務を負はしてそれで正しいのであるか、と人はいふ、しかしかやうに神の正義を判斷することは人が絶對的正義といふものの定義をもつてゐることを豫想する。人はそれをもたないではないか。かくして右の塗なるろんぎは、人間をして神に向ふことをゆるさぬピュロニスムによつてうち破られなければならない (二) モンテーニュ二ノ一二に「さやうな熱狂をうちつづすために私の用ひるところの、さうして私には一ばんできたうだとおもはれるところの方法は、人間の自尊心と高慢とをへしをりふみにじることであり、人間に對し人間の虚妄とたよりなさとな能とおもひ知らせることであり、人間の手から理性といふけちな武器をもぎとることであり、聖なる威容のけんいとそんけいのもとに頭を下げさせ平伏させることである」

#### 會話

三九一 宗教に對する大言壯語。\*「私は宗教を否定する」\*

#### 會話

ピュロニスムは宗教に役立つ。



三九二 「……だから、これらのものを定義しようとすれば必ずこれらのものを晦冥なものにしてしまふといふことは、妙なことである。我々は、これらのものをしじゅう口にしてゐるのであるし、また……」  
我々はすべての人がこれらのものを同じ\*仕方\*で\*考へてゐると想像してゐる、しかしさう我々が想像するのにはなにも根據があるのではない、なぜなら我々はそれを立證するものをなにも一つ持たないのであるから。なるほどことばは同じ場合に適用せられるものである、さうしてここに二人の人がゐて位置をかへるところの一つの物體を見るとするならばそのときはいつでも、二人とも、同じ對象の在り方を同じことばで表現して、物體はうごいた、とどちらの人もいふ、それは私によく分る。さうして我々はこの適用の一致といふことから推して觀念の一致といふちからづよい推測をひき出す。しかしながらこの論法は、\*たとひそれが確かであるとするはうのがはに賭ける理由が多々あるにしても、どうしても動かぬ確信を持たうといふことになる\*と\*たうてい得心のゆく論法ではない、なぜといつてちがつた假定からして同じ歸結がひき出されることはしばしばあるといふことを我々は知つてゐるからである。

このことはすくなくとも問題をこんらんさせるのに十分である。それらのものを我々に保證してくれてゐるところの生來のちゑの光がこのことのおかけですつかり消えうせてしまふのではない。あのアカデミア派の人々ならあるひは右の論法を請け合つたかもしれないところだ。<sup>(一)</sup>がしかし、このことのおかけで生來のちゑの光は曇つてしまふ、さうして獨斷論者たちは困らされるのである、それはピュロンの一黨にとつては光榮あることであるが。かのあいまいなる曖昧さにおいて成り立ち、我々が疑ひをもつてそのあ

ゆる光をとりわけけることも生來のちゑをもつてそのあらゆる闇をばらひのけることもできない或る疑はしい晦冥さにおいて成り立つピュロンの一黨にとつては。

(一) アカデミア派なら請け合つたかもしれない、なぜならこの派の人々は類似といふことに満足する。\*I\*  
\*II\* ロワイヤルの『論理學』四ノ一によればアカデミア派は確實性を否定するが類似を容認する。ピュロンの徒はこの類似性をも否定しあらゆるものはひとしく晦冥であり不確實であるとなへる。

三九三 神と自然とによるあらゆる法律をすてて自分たちみづからで法律を作りこれにきちんと従つてゐる人々がこの世にゐる\*のを見るのはをかきなごとである\*。たとへばマホメットの兵士とか盜賊とか異教徒とかそのほかさういふ人々のやうに。ろんり學者だつてさうだ。

この人々があのやうにも正しくあのやうにもきよい多くの境界をのりこえたところを見ると、この人々の放埒はなにもらの限度も\*仕切りも\*もたないにちがひないとおもはれる。

三九四 ピュロン派の人々、ストア派の人々、無神論者たち、これらの人々の原理はすべて眞である。ただし結論はいつはりである。反對の原理もまた眞であるから。

本能 理性

三九五 我々は證明するといふことにおいて無能力である、これにはいかなる獨斷論もうちかつことはで



きない。我々は真理の観念をもつてゐる、これにはいかなるピュロニスムもうちかつことはできない。

三九六 二つのものが人間に人間のすべての性質についてをしへてくれる。本能と経験と。

三九七 人間の偉大さは人間が自己をみじめなるものと知ることにおいて偉大である。樹木は自己をみじめなるものとして知ることがない。

それゆゑに「自己を」みじめなるものと知ることとはみじめである、しかし自分がみじめであるといふことを知るといふことは偉大である。

三九八 ほかでもないすべてこれらのみじめさが、彼の偉大さを證據立てる。それらは大貴族のみじめさであり廢王のみじめさである。

三九九 ひととは意識を持たずしてはみじめであることがない。廢屋はみじめではない。人間のほかにみじめなるものはなく。Ego vir videns.<sup>(1)</sup>

(1) エレミアの哀歌三ノ一のはじめのことは。「我は彼の震怒の管によりて艱難にあひたるひとなり」

#### 人間の偉大さ

四〇〇 我々は人間の心をひじやうに偉大なものにおもつてゐるので、人からけいべつをうけること、人からそんなけいけいを受けないことに、堪へることができない。人々の至福はすべてこのそんなけいにかかつてゐる。

#### 榮 譽

四〇一 獸はお互ひに讚嘆しあはない。馬はその仲間を讚嘆しない。それは彼らのあひだに競争心がないからではない。むしろ結果がないからである。なぜといふのに、どんなにのろまでどんなにぶかつかうな馬でも馬小舎にあつてはその燕麥を相手の馬にゆづることをしない、人間なら人からさうしてもらひたいところだが。これらの動物の徳はそれみづからで満ち足りてゐる。<sup>(1)</sup>

(1) ボールロワイヤル版はこれをさらに説明して「人間のあひだではさうではない。人間の徳はそれみづからで満足しない。それを轉じて自分の利益としなければ満足しない」

四〇二 人間の邪欲のうちにさへみられるところの人間の偉大さ。人間は邪欲から一つの驚嘆すべき規則をひき出すことができたし、また一幅の慈愛の繪畫をこしらへることもできた。



四〇三 現実の理由は邪欲から一つのじつに美しい秩序をひき出したことにおいて人間の偉大さをしめし  
てゐる。

四〇四 人間のこの上もない卑小性は人間が名譽を求めることにある、しかしほかでもないこのことは人間の優秀さをしめすこの上もなく大きなしるしである。なぜといふのに人間は地上にいかなるものを所有しようともいかなる健康をもたうともいかに重要な利便をもたうとももしひとからそんけいをうけないならば満足しない。人間は、ひとの理性をひじやうに高く評價するから、地上にいかなる利益をもたうとも、もしひとの理性のうちには有利に座をしめないならば、満足しない。この座は世にもすばらしい座であり、いかなるものも彼のこの欲望をほかへと外らすことはできない、この欲望は人間の心のもつ最もうつけしがたい性質である。

人間を極度にけいべつし人間を獸にひとしいとする人々もやはりひとから歎稱せられ信用せられたいとおもふ、そこで彼ら固有の思想のゆゑに自家撞著をおこす。なにもものよりもつよい彼らの本性は、理性が彼らを彼らの卑小であることをもつて説きふせるよりはさらにつよく、彼らを人間の偉大であることをもつて説きふせるのである。

(一) モンテーニュ二ノ一六「エピクロスが死にのぞんでのべた最期のことばを見よう、そのことばは偉大で

ありかかる哲人にふさはしいものではある、がなにかそこには自分の名前をたふとぶ心持が見とめられはしまいか。彼がかずかずの訓言をもつて駁してきたところのあの傾向が」

## 矛盾

四〇五 高慢はいかなるみじめさともつりあふ。すなはち高慢はそれのみじめなことを匿す、またもしそれのみじめさをあらはにしめすとするなら、そのみじめさを知つてゐることを誇る。

四〇六 高慢はいかなるみじめさともつりあひいかなるみじめさの重みにもうちかつ。これはふしぎなる怪物でありまことに明白なる迷ひである。これはその座から落ちその座を不安のうちにて求めてゐる。すべての人がそれをしてゐるのである。誰がその座を見出したかを見よう。

四〇七 邪悪の心は自分のがはに道理があると、高慢となり、道理をくまなくあきらかにならべたてる。けんかくな生き方あるひはきびしい選擇がまことの幸福をとらへることができず、自然に従ふといふことには戻らなければならなくなると、邪悪の心はこの復歸をたねにとつて高慢となる。

四〇八 悪にはおちいりやすい。悪は數限りなくある。善はほとんど一つである。しかし或る種の悪は、ひとが善とよんでゐるものと同じやうに、見ぬくことがむづかしい。そのためにひととはしばしばこの特殊



の悪を善であるとしてゐる。\*この悪に到達しようとするのには、善に同じやうに、魂の並みならぬ偉大さをさへ必要とする\*

人間の偉大さ

四〇九 人間の偉大さは\*じつにあきらかに見えるものであつて\*人間のみじめさのなかにさへ見つけることができるほどである。なぜといふのに我々は動物において本性であるところのものを人間においてはみじめさとよんでゐるのであるから。そこでかういふことが分る、人間の本性は、ほんざい動物の本性にひとしいのであつてみれば、それはむかし彼の固有のものであつたところのすつとよい本性から墮落したものである。

といふのはかうだ、廢王をのぞいて一たい誰が自分の王でないことを不幸とおもふであらうか。人々はパウルス・エミリウスが執政官をやめたとき氣の毒だとおもつたであらうか。むしろすべての人々はパウルス・エミリウスが執政官であつたそのことを仕合せだつたとおもつた、なぜなら彼の地位はいつまでも執政官であられるべき地位ではなかつたからである。しかし人々はペルセウスが王をやめたときひじやうに氣の毒に\*おもつた\*なぜならペルセウスの身分はいつまでも王であるべき身分であつたからである、人々は彼を不幸だとおもふのあまり、彼が生きながらへてゆくのをふしぎにおもつたほどである。

口が一つしかないことを誰が不幸とおもふであらうか。目が一つしかないことを誰が不幸とおもはないであらうか。我々は三つの目をもたぬことをかなしむ氣にはおそらくなるまい、が目を一つもたぬといふことになると思つてもかなしむであらう。

四一〇 マケドニアの王ペルセウス。パウルス・エミリウス。——人々はペルセウスが自殺しないといつて非難した。

四一一 我々は、我々に手をかけ我々ののをしめつけるところのあらゆるみじめさを見るにもかかはらず、我々がおさへつけることのできぬ、さうして我々をひきおこす、一つの本能をもつてゐる。

四一二 理性と情念とのあひだにおこなはれる人間の内部のたたかひ。

もし人間が情念をもたず理性だけをもつてゐるとしたら……  
もし人間が理性をもたず情念だけをもつてゐるとしたら……

しかし人間はいづれをもつてゐるためにたたかはないであることができない、なぜなら一とたたかふことによつてしか他と平和を保つことはできないのであるから。それゆゑ人間はつねに分立し、自己にさからふ。

四一三 理性と情念とのあひだのこの内的闘争は、平和をのぞんだ人々を二派に分けた。一は情念をすてて神となることをのぞみ他は理性をすてて野獸となることをのぞんだ。デ・ペロ<sup>(一)</sup>。しかしいづれもそれ



が叶はなかつた。理性は依然としてとどまり、情念の卑小と不正をとがめ、理性をすてる人々のいこひをかきみだすのであり、また情念は情念をすてようとのぞむ人々のうちに依然として活ばつて存在するのである。

(一) デ・バロー Des Barreaux はバスカルやミトンの友人で無神論者。老いても改心するどころかこんな意味の唄を作つてゐたといふ。「私は私の理性をもつて私を培ひ、野獸にならうとおもふ」

四一四 人間は必然的に狂人である。狂人でないことは一つのほかのかたちにおいて狂人であることにならざるほどそれほどにも必然的に狂人である。

(二) 狂氣は人間の本来の状態である、従つて狂氣であることをやめるならば人間は人間としての存在理由をもたなくなる、そこで彼の存在はあらためて一つの狂氣となることになる。なほラロシユフウコーの格言二三  
一に「自分一人だけ賢者にならうとおもふのはひじやうな狂氣である」また同じく二一〇に「狂氣なしに生きる人は當人のおもふほどに賢いひとではない」

四一五 人間の本性を考察するのに二つの仕方がある。一つは人間の目的に従つて。さうするとそのとき人間は偉大であり無比である。もう一つは一般性に従つて。たとへば一般性に従つて馳驅や *animus arcendi* を見ることによつて馬や犬の本性をばんだんするやうに。そのとき人間は卑賤であり、下等である。さてこの二つの考察の仕方がひとをして人間をさまざまに批評せしめ哲學者をしてさかんにぎろんせしめる。

なぜといふのには他の推量を否定するからである。すなはち一はいふ「人間はさやうな目的のために生れてゐるのではない、なぜなら人間のいかなる行動もそれをいとふ」他はいふ「人間はさやうないやしい行動をとるとき目的を遠ざかる」

(一) *animus arcendi*——番犬のもつ「追ひはらふ本能」

\*P||Rに\* 偉大と悲慘\*

四一六 悲慘は偉大から結論せられ偉大はまた悲慘から結論せられるから、ある人々は悲慘を偉大の證據として用ひれば用ひるほどそれだけ一そう悲慘をつよく結論することができたし、またある人々は偉大をほかでもない悲慘から由來するものとして論ずれば論ずるほどそれだけ一そう偉大をつよく結論することができた、そこでこの人々が偉大を證明しようとしてのべたところのあらゆることは、かの人々にはただもう悲慘を結論するためのろんりとして役立つことになるばかりであつた、なぜといふのに人は高みからおちるほどそれだけみじめであり、みじめであるほどそれだけ高みからおちたこととなる。右の人々はかぎりないわをゑがいてお互ひにつながりあふ。なぜなら人々が光をもつに比例して人間のうちに偉大と悲慘とを見出してゆくといふことは確かであるから。\*要するに人間は自分かみじめであることを知つてゐる、だから彼はみじめである、なぜなら彼はみじめなのであるから。しかし人間はまさしく偉大である、



なぜなら彼は自分がみじめであることを知つてゐる。

四一七 人間のこの二重性はひじやうに明白であるから、我々には二つの魂があると考へた人々がある。單なる一つの對象がとほもない高ぶりからおどろくべきよわ氣へとあのやうにもまたじつにとつぜんにも變化するなどといふことはありえないことのやうにこの人々にはおもはれたのである。

四一八 人間に彼の偉大さを見せないで彼のいかに獸にひとしいかをあまり見せすぎるのは危険である。人間に彼の卑小さを見せないで彼の偉大さをあまり見せすぎるのもまた危険である。どちらをも知らさずにおくのはさらに危険である。どちらをも示してやるのは大そう有益である。

人間は自分が獸にひとしいと信じてはならない、また天使にひとしいと信じてもならない、どちらをも知らずにはならない、どちらをも知らなければならぬ。

四一九 私は人間が一のうちに憩ふことをも他のうちに憩ふことをもゆるさない、そのゆゑは人間が場所もなく憩ひもなくて……

四二〇 彼が自己をほめるなら私は彼を卑しめてやる。彼が自己を卑しめるなら私は彼をほめてやる。さやうにしていつも彼にさからつて、つひに彼をして彼が不可解なる怪物であることを納得せしめる。

四二一 人間をほめることにきめる人々、人間をけなすことにきめる人々、氣をまぎらすことにきめる人々、私はさういふ人々をひとしく非難する。あへぎつつ求める人々をしか私は是認することができない。

四二二 救ひ主に手をさしのべるために、むなしくまことの善を尋ね求めてうみつかれることはよい。

矛盾 人間の卑小と偉大とをしめたのちに

四二三 人間は今人間のもつべき正しいねうちを知るがよい。人間をして自己を愛せしめるがよい、なぜなら彼のうちには善とせらるべき本性がある。しかしさうだからといって彼のうちにある卑小を愛せしめてはならぬ。人間をして自己をけいべつせしめよ、なぜならその能力はむなし。しかしさうだからといってあの本來的なる能力をけいべつせしめてはならぬ。人間をして自己をいとはしめよ、自己を愛せしめよ、彼は彼のうちに眞理を知るから、幸福になるからをもつてゐる、がしかし、かはらざる或は満ちたりたる眞理はすこしもつてゐない。

従つて私は人間をいざなつて眞理を發見したいといふのぞみをいだかせたいとおもふ、また人間をして眞理を發見するであらう場所へと眞理を追ひもとめてゆけるやうに心構へをさせ、欲情をふりすてさせたいとおもふ、なぜなら私は認識力が欲情によつていかにくもらされるかを知つてゐるから。また邪欲はそれだけで人間の意志を決定するものであるがゆゑに私は人間をして邪欲をいとせたいとおもふ、さうし



てこの邪欲のために、彼が選擇をするにあつては盲目にならないやうに、また彼が選擇をしをへたであらうのちは彼の歩みがひきとめられないやうに、計りたいとおもふ。

四二四 宗教の認識から私を最も遠ざけるやうにおもはれたこれらの矛盾はすべて、私を最もはやく眞なるものへとみちびいてくれた。

〔第七類 キリスト教の教理〕

第二部

信仰をもたぬ人間はまことの善を知ることできず正義を知ることできない

四二五 すべての人間は幸福であることを求める。これには例外がない。そこに用ひられる手段がいかに異なるにせよ彼らはすべてこの目的に向つて努力してゐる。ある人を戦争に行かせるのも、ほかのある人を戦争に行かせるめないのも、これら二人のうちにある右の同じ欲望のせるである。ただその同じ欲望に異なる見解が伴ふだけである。意志はこの目的に向つてのほかはいかにわづかでも歩かうとしない。この欲望は、みづからの首を吊らうとする人にいたるまで、あらゆる人々のあらゆる行爲の原動力である。

それにもかかはらず、すべての人がつねに目ざしてゐるこの點にかくも久しい年月このかた誰一人として\*信仰なくして\*到達した者はない。\*すべての人はなげく\*。王、臣下、貴族、平民、老いたる者、若き者、強き者、よわき者、學者、無智な者、健康な者、病める者、あらゆる國、あらゆる時代、あらゆる年齢、あらゆる身分の人々が。

かやうにも久しくかやうにも不斷のさうしてかやうにも一律の經驗をしてきてゐるのであるから、たうてい我々の努力をもつてしては善に到達することはできないと\*十分に\*得心しなければならぬはずで



ある。ところがこの範例もいつかうに我々を賢くしてくれない。といふのはかうだ。一たいいかに全く類似した範例といつてもそこに必ずなにか微妙なちがひがあるものであり、そこからして我々は、今度こそは前の場合のやうに期待を裏切られることはあるまいと期待をかけるのである。さやうにして現在では我をすこしも満足させてくれず経験は我々をあざむいてゆき、不幸から不幸へと我々をみちびいて、つひには不幸の永久の極點である死にいたる。

さうであるならばこの渴仰と無力とが我々に知らせようと叫んでゐることがらは、ほかでもない、人間のうちには昔眞の幸福があつたけれども今はただその幸福の目じるしとその全くうつろなるあとかたのみが残されてゐるといふことであり、また人間は、現在のものからは得らぬれ援助を、無きものうちにたづねもとめながら、自分をとりまくあらゆるものをもつてそのあとかたを満たさうと\*無益の\*努力をこころみてゐるといふことである。人間のたづねもとめるその援助はまったくちからなき援助である。なぜなら無限の深淵は無限にして不易なるものすなはち神そのものによつてのほか満たされることはないのであるから。

神のみが人間のまことの善である。ところで人間が神をはなれて以來、ふしぎなことに、自然におけるありとあるものが神のかはりに神の座を占めた。天體、空、地、要素、植物、甘藍、ほろ、獸、こん蟲、仔牛、へび、熱病、ペスト、戦争、ききん、不徳、姦淫、不倫。人間がかの\*まことの\*善を失つて以來あらゆるものが一やうに彼には善であるやうに見えるのである。彼みづからを殺すことさへもが。それらのものは、神、理性、自然、いづれに對してもじつにさからふものであるのに。

まことの善を、ある人々は權威のうちに、ある人々は好奇と學問のうちに、またある人々は逸樂のうちに尋ね求める。

\*まことの善に\*じつさいにおいてほかの人々よりもずつと近づくことのできたある人々は、かう考へた、萬人ののぞむところのふへん的な善は、たつた一人の者だけが所有することのできるにすぎないやうな、さうして分割せられてゐるものであるがゆゑにその所有者は自分の所有してゐる部分をたのしむことによつて満足するよりはむしろ自分の所有してゐない部分を不足におもふことによつて苦しむはうがずつと多いやうなさういふ個々の事物のうちにはあるはずはないと。この人々はさうしてかうさつた、まことの善は萬人が、減ることなくうらやむこともなく同時に所有することのできるものでなければならぬと、さうして誰もこれを自分の意志に反して失ふといふやうなことはありえないものでなければならぬと。さてこの欲求は萬人のうちに必然的に存在するものであり人間のいだかざるをえないものであるがゆゑに人間にとつて自然的なるものであるといふのがこの人々の理由であり、そこからこの人々はつぎのやうに結論する……

- (一)「生きてゐるあらゆる人々の共有のこゑは自分の不運不幸に對する絶えざる嘆きではなからうか」G. du Vair, La Sainte Philosophie, éd. 1603. (二)モンテーニュ「二殊にプラトンについて語られてゐるところを参照」彼(プラトン)はこれらの書物において世界を天空を星を地球をそれから我々の魂を神にしてゐる」(三)「プロテウス」の『キリスト教の眞理について』四ノ二は「天體やもろもろの要素すなはち火・水・空氣・土に對する古代信仰」のことをのべてゐる。(四)「ユヴェナリス二〇ノ九は、ほろ(毒)の一種」やたま



ねぎに對する信仰のことを引用してゐる。(五) モンテニユニノ一二「私はむしろへびや犬や牡牛をがむ人々に従つたかもしれない」(六) エヒクテトスやモンテニユやグロテイスののべるところによればロマにおいては熱病に對して祭壇が築かれてゐた。(七) ポスユエの有名なことばを回想しよう「ひとは獸や爬虫類をまでも禮拜した。神を除いてはすべてが神であつた。さうして神がその力を顯はさうとして造りたまうた世界は偶像の神殿となつたやうにおもはれた」(八) ストア派の人々。

四二六 まことの自然が失はれたのですべてが彼の自然となる、ちやうどまことの善が失はれたのですべてが彼のまことの善となるやうに。

四二七 人間はどんな地位に自分をおいたらよいかを知らない。人間はそのまことの居場所からあきらかに落ちてそこからさまよひ出てをりそれをふたたび見出すことができない、彼はくぐりぬけることのできぬ暗黒のなかでそれをいたるところにさがしてゐる、不安をいだいて、成功することなく。

四二八 自然をもつて神をあかすことが弱さのしるしであるとするなら聖書をはいべつしてはならない。あのかずかずの矛盾を知つたといふことが強さのしるしであるとするなら聖書をおもんじなければならぬ。

四二九 獸に服従し獸をあがめるにいたるほどに、人間の卑小なること。

P || R K  
(二)

\* はじめ \*

\* 不可解性を説明したあとで \*

四三〇 人間の偉大と悲慘とはこのやうにあきらかであるから従つてまことの宗教は、人間のうちに偉大についてのなにか大きな原理のあることを、また悲慘についての大きな原理のあることを、必ずをしへてくれるものでなければならぬ。

\* なほ \* まことの宗教は、これらのおどろくべき矛盾をよく分るやうに説明してくれるものでなければならぬ。

人間を幸福にするためにまことの宗教は、一人の神があること、人は神を愛さなければならぬこと、我々のまことの至福は神のうちにあることであり我々の唯一の悪は神からはなれることであることををしへなければならぬ。まことの宗教は、我々が闇に満たされてゐるために神を知り神を愛しようとしてもそれがさまたげられること、かくして我々はまことのつとめとしては神を愛しようとするけれども邪欲のために神から遠ざかるがゆゑに我々は不正に満ちたものであるといふことを知らなければならぬ。まことの宗教は、我々が神に對しておよび我々自身の善に對して持つところのこれらのもろもろの對立をよく分るやうに説明してくれなければならない。まことの宗教はこの無能力をすくふ薬ををしへその薬を手に入れる方法ををしへてくれなければならない。これらについて諸君は世の宗教といふ宗教を吟味せられるがよい、さうしてそれらを満足せしめるものがキリスト教以外にあるかどうかを見られたい。



我々のうちにある善を一切の善なりとして我々にさしだすところの哲學者たちはそれであらうか。そんなところにまことの善はあるのであらうか。この哲學者たちは、我々の悪をいやす薬を見つけたであらうか。人間を神にひとしいものとしたことは人間の傲慢をいやすことになつたであらうか。我々を動物にひとしいものとした人々、それから我々に地上の快樂をあたへてこれを一切の善であるとし永遠における善であるさへした\*マホメット教徒たちは\*我々の邪欲をきよめてくれたであらうか。

それならば一たいいかなる宗教が高慢と邪欲とをいやすみちをしへるのであらうか。結局いかなる宗教が我々の善を、我々のつとめを、また我々のつとめから我々をそむかせるところの我々のよわさを、このよわさの原因を、これをいやしうる薬を、この薬を手に入れる方法を、をしへてくれるのであるか。ほかのいかなる宗教もそれをする事ができなかつた。我々の神のちゑはいかなることをのべるであらうかそれを見よう。神のちゑはのべる。

「人間から眞理をもなぐさめをも期待してはならない。私は諸君をこしらへたものであり諸君の何ものであるかをしへることのできる唯一人のものである。\*しかし\*諸君は\*今はもう\*私が諸君をこしらへたときの状態にゐない。私は人間をきよくけがれなく完全なものに創造した。私は人間を光とちゑをもつて満たした。私は人間に私の榮光と私のふしぎをつたへた。人間の眼はそのとき神の威容を見てゐた。人間はそのとき彼を目しひとするところの暗黒のうちにはゐなかつたし彼をくるしめる死や悲惨のうちにもゐなかつた。しかし彼はかくも多くの榮光になつて、どうしても高慢におちいらざるをえなかつた。彼は自己を自己の中心となし、私のたすけから獨立することをのぞんだ。彼は私の支配をのがれた、

さうして自己の至福を自己のうちに見つけようといふ欲望をもつてその身を私にひとしいものにしてしようとしたから、私は彼をするがままにまかせた、さうして彼に服従してゐたもろもろの被造物をして彼に\*そむかせ\*それらの被造物を彼の敵とした。そこで現在人間は動物にひとしいものとなつた。さうして私から遠くはなれてしまひ、ただからうじて創造者のおほろけな一すぢの光が彼にのこつてゐるにすぎない。人間のすべての認識力はかやうにもうちけされ、かきにごされたのである。感性は、理性とは別個にさうしてしばしば理性の支配者として、理性を快樂の追求へとつれさつた。すべての被造物は人間をなやませ、いゝわくし、彼を支配するの力による屈服をもつてしたり甘美による魅惑をもつてしたりする。甘美による魅惑をもつてする支配は一そおそるべくまた一そう逃れがたい。

これが現在人間のゐる状態である。人間は第一の本性による幸福のいくらかのよわい本能をのこしてゐる。さうして第二の本性となつたところの盲目と邪欲とのみじめさのうちに沈んでゐる。

私のうちあけるこの原理によつて諸君は、あらゆる人間をふしぎがらせあらゆる人間をさまざまの意見に分裂させたところのあのやうにも多くの矛盾についてそれらの矛盾の原因をさとることが出来る。今はかくも多くの悲惨の試練もうちけすことのできぬ偉大と榮光との感情をあますところなく觀察せられるがよい、さうしてその感情の原因がもう一つの本性のうちになくてよいものであるかどうかを見きはめられるがよい」



おゝ！ 人間よ、諸君自身のうちに悲惨をいやす薬を求めることは無益である。諸君のもつていかなるちゑの光といへども、眞理と善とを見出すのは、決して諸君自身のうちにおいてではないといふことをさるにいたるにすぎない。

哲學者たちは諸君に救ひを約束した、さうしてそれをばたしえなかつた。哲學者たちは諸君のまことの善がいかなるものであるか諸君のまことの状態がいかなるものであるかを知らない。

知りさへもしない諸君の苦惱をいやす薬をどうしてあたへることができたらうか。諸君の大いなる病ひ

は、諸君を神からひきはなすところの高慢であり諸君を地上にむすびつけるところの邪欲である。

ところで彼らはすくなくともそれらの病ひの一つをそだてることのほかはしなかつたのである。もし對象として神をあたへたとするならばただ高慢をそだてるためにほかならなかつた。諸君は諸君の本性からみて神に似たるもの神にかなへるものである、さう彼らは諸君をしておはしめたのである。ところでこの主張のむなしさを見てとつた人々は、本性が動物にひとしいものであることを諸君に領會せしめて諸君をまた別の深淵に投じた、さうして諸君をみちびいて諸君の善を動物の受け前であるところの邪欲のうち求めしめたのである。諸君の不正をなほす方法はそこにはない。諸君の不正をこれらの賢者たちは知らなかつたのである。私のみが諸君の何者であるかを知らしめることができる。

アダム。イエス・キリスト。

もし諸君が神につながれるならばそれは本性によつてではなく恩寵によつてである。

もし諸君がおとしめられるならばそれは本性によつてでなく痛悔によつてである。

従つてこの二重の能力は……

諸君は諸君の創造せられたときの状態にない。

この二つの状態が明示せられたのであるからには諸君がそれらを認めないであるといふことは不可能である。

みづからの心のうごきに従はれよ、みづからを觀察せられよ、さうしてそこに二つの本性の生きいきとした特徴が見出されないかどうかをみられるがよい。

かくもかすかすの矛盾が單一なる主體のうちに見出されるものであらうか。

不可解

すべて不可解なるものは存在しないといふわけにはゆかない、たとへば有限に等しい無限の數、有限に等しい無限の空間<sup>(四)</sup>。

神が我々とむすばれるといふことは信じがたい



この考へは人間の卑小性を眺めることからのみ生ずるものである。しかしもし諸君がこの考へをまじめにいただいてゐるといふのならばその考へを私とともにふかく辿られるがよい、さうして我々がじつさいきはめて卑小であること、神の慈悲が我々に神とまじはる力をあたへることができるとか我々はみづからでは知る能力がないほどに卑小であることを認めていただきたい。なぜといふのに自己をかくもよわいものであると心得てゐるこの動物がいかなるわけがあればとて神の慈悲をおしはかるけんりをもち神の慈悲を氣のむくままに限定するけんりをもつのであるかを、私は知りたいものだとおもふからである。……この動物は\*神といふもののいかなるものであるかを一向に知らないものだから自己自身のいかなるものであるかを知らない\*そこで彼自身の状態を見ようにもまつたくもたらされて見ることができず、神は自分と神とまじはる力をあたへたまふことができないなどと敢へていふのである。

しかし尋ねたい、神は人間に向つて、神を愛し神を知るといふこと以外になにかを要求したまふであらうか。また人間はおのづから知るちからと愛するちからとをそなへてゐるものであるのに、神はその身を人間によつて知られ愛せられるものとなしたまふことはできないなどといふことを、どういふわけで信するるのであるか。人間はすくなくとも自分が存在してゐることさうして何ものかを愛しうることを知つてゐる、これは疑ひのないことである。\*それゆゑに\*もし人間が自己の存在してゐる暗黒のうちに何ものかを見、地上の事物のうちに愛の何らかの對象を見出すといふのであるならば、いかなるわけで人間は、もし神から神の特性の何らかの光をうけてゐるのであるとするなら、神がその身をこのやうな仕方て人間につたへたいとおもひたまふさういふ仕方て、神を知り神を愛することができないことがあらうか。だから

右のごとき推論の中には、たとひその推論が明白なる謙虚にもとづいてゐるやうに見えようとも、がまんならぬ自負心がたしかにある。その明白なる謙虚は、もし我々をして、我々がいかなるものであるかは我自身によつては知りえないからこれを知るみちはただ神によるよりほかはないと告白せしめることがないならば、眞實のものとはいへないし正しいものともいへない。

私は諸君の信仰を理由なく私に屈服せしめようといふつもりはない。暴君のやうに諸君をうち従へようといふのではない。また私は諸君にあらゆることがらをよく分るやうに説明しようといふのでもない。ただ、これらの矛盾を調和せしめるために私は、私がいかなるものであるかを諸君になつとくせしめるところのさうして諸君の拒むことのできぬもろのあかすとふしぎによつて私を權威づけてくれるところの私のうちなるきよきかすのしるしを、信服すべきあかしをもつて諸君に明らかに見せようといふのである。さうしてつぎに、私のをしへることがらの眞であるか否かは諸君自身によつては知りえないといふ理由以外に私のをしへることがらを拒む理由はないのであるから、私のをしへることがら<sup>(五)T</sup>を……諸君をして信せしめようとするのである。

神は人々をあがなひ、神を求める人々に救ひの手をのべようとした。しかし人々はそのことに大さうふさはしくないものとなつたから、神が、べつだん人間に對し義務としていだかなければならぬわけのものではない慈愛の心を抱いて或る人々にはあたへるところのものを、他の或る人々には、この人々の頑迷のゆゑをもつてあたへることを拒む、といふことは正當である。もし神がかたくななることこの上もない人々の強情をうちくちかうとのぞみたまうたのであるならば、神はその身を大いに明らかにあらはして、



この人々をして神の本質の眞理をうたがひえぬやうにしたまうたにちがひない、ちやうどこの世のをはりの日、よみがへれる死人もいかなる目しひも見るであらうほどの雷電のひらめきと自然の顛動てんどうとをもつてあらはれたまふであらうやうに。

神がその身を現はさうとのぞみたまうたのはさやうな仕方においてではない。平和のおとづれのうちにおいてである。なぜなら多くの人々は神の慈愛にふさはしくないものとなつてゐるので、神は人々を彼らのぞまぬ善の缺乏のうちにはうつておかうとしたまうたのである。従つて神が明らかにきよき仕方でもた萬人を必ず納得せしめるやうな仕方では現はれたまふといふことは正しいことではなかつた。とはいへ神が、心から神を求める人々にも見出されぬほどに隠れたる仕方であつたといふこともまた正しいことではなかつた。神はこの人々には十分に知られたいとのぞみたまうた。そこで神はまごころをもつて求める者にはあらはに現はれ、ひたすら逃げる者には隠れることをのぞんで、神を知るところを調節し、かうして、求める者には見え求めぬ者には見えぬ神のまろものしるしをあたへたまうたのである。

ひたすら見ることをみかねがふ人々には十分の光があり、それと反對の傾きをもつ人々には十分の闇がある。

(一) P || R に——すなはちポール・ロワイヤルに。『パンセ』初版のはじめにつけられた序文によればパスカルは一六五八年頃彼の友人たちに對し彼の將來あらさはうとしてゐるキリスト教辯證論の内容を語つてきかせたことがあり、この P || R といふしるしはポール・ロワイヤルにおいてなされたその講演のことに關するものと考へられる。(二) 我々を動物にひとしいものとした人々——すなはちエピクロスエピクロスの徒。(三) スト

ア派の人々は高慢と自負心とをそだてたしエピクロスの徒は肉の悪欲をそだてた。(四) 『幾何學的な心』に關する省察中においてパスカルは、有限なる形、有限なる數、有限なる時間、有限なる運動が、どこまでも限りなく分けてゆくことのできる無限の要素の和であることをのべてゐる。(五) このところを Faugère は sûrement (確實に) とよみ Molinier は sciemment (ことごとく) とよみ Brunshvicg は sans hésiter (ちゆうちよすることなく) とよんでゐる。原文には sans r とある。sans raison と書きかけて消したのだとす。Tournour の説に從ふ。

四三〇ノ二 すべて不可解なるものは存在しないといふわけにはゆかない。

四三一 ほかのいかなる宗教も、人間が最もすぐれたる被造物であることを認めはしなかつた。あるものは人間のもつ優位性の眞實なることを十分に認めたが、人間が人間に關し本來的に抱いてゐるところの弱小の氣持を怯懦や忘恩ととりちがへた。またあるものはこの弱小がいかに現實なるものであるかを十分に認めたが、人間にとつてこれまた同様に本來的であるところの偉大の氣持を笑ふべき高慢としてとりあつた。

諸君の眼を神のはうへあけよ、とある人々は人間にいふ、諸君と似てゐるところの者さうして諸君からあがめられようとして諸君をこしらへたところの者を見よ、諸君は自己を神に似たるものとするのできる。諸君が神に従ひたいとおもふなら、ちゑは諸君を神にひとしいものとしてくれるであらう。<sup>(一)</sup>「顔をあけよ、自由なる人々よ」とエピクテトスはいふのである。またある人々は人間にいふ、諸君の眼を地上



におとせ、卑しい蟲けらなる者よ、さうして諸君の仲間であるところの獣どもを見よ。<sup>(二)</sup>

一たい人間はどうなるのであらうか。人間は神にひとしいものとなるのであるか。獣にひとしいものとなるのであるか。何といふおそるべき<sup>(一)</sup>だたり！ 一たい我々は何ものとなるのであらうか。それらのことからから誰かつぎのやうなことをさとらぬ者があらうか。人間は彼のをるべき場所から落ちて、さまよつてゐるのであり、その場所を不安のうちにさがしてゐるのである。さうしてそれをふたたび見出すことができないのである。それなら一たい誰が彼をその場所へ差し向けてくれるのであるか。どんなに偉大なる人間もそれをする<sup>(二)</sup>ことができなかった。

(一) これが『エピクテトスとモンテーニユとの對話』によればエピクテトスの結論である。人間は精神と意志と「この二つの力によつて完全に神を知り、神を愛し、神に従ひ、神をよるべし、あらゆる罪からいやされ、あらゆる徳を身につけ、かくて聖き者となり、神の友となることができ」パスカルはそこで、これを悪魔的高慢の原理とよんでゐる。(二) 上記『對話』によればモンテーニユは一切を不確實であるとし理性のむなしさを説き「理性をその占めてゐる優位の座から降らしめお情けをもつてこれを動物と同列におく」

四三二 ビュロンの思想はほんたうである。<sup>(一)</sup> なぜなら結局人々はイエス・キリスト以前にあつてはどこに自分たちがあるかを知らなかつたからでありまた自分たちが偉大であるのか弱小であるのかといふことも知らなかつたのであるから。偉大をといいた人も弱小をといいた人も一向に何も知らなかつた、さうして理

由もなくまた必然性もなく推測してゐたのである。一をしりぞけることにおいて或は他をしりぞけることにおいて、絶えずさまよつてゐるのである。

Quod ergo ignorantes, queritis, religio annuntiat vobis.<sup>(二)</sup>

(一) 「恩寵の燈火なくして我々の見るところのものは一切が空であり狂氣である」(モンテーニユ二一〇一)  
既掲『パスカルとサーシとの對話』中の次ぎの文言を参照。「全き眞理を知るためには一しよに認識せられなければならぬこの二つの状態が別々に認識せられたがゆゑに必然的に人は高慢と怠惰との二つの不徳のうちの一つへとみちびかれるのである。人間はすべて恩寵以前にはどうしてもこれらの不徳のうちにある。なぜと云つて人間は怠惰によつて無秩序のうちにあるとすれば、虚榮によつて無秩序を出るのであるから」なほ断章四三五を参照。(二) 「汝の知らずして求むるものを宗教は汝につげん」。パウロがアテナイ人に語ることを想起しよう。「われ汝らが拜むものを見つゞ道をすぐるほどに『知らざる神に』と記したる一つの祭壇を見出したり。さればわれ汝らが知らずして拜むところのものを汝らに示さん」使徒行傳一七ノ二三。

人間のもつすべての本性を理解したあとで

四三三 一つの宗教が眞であるためには、その宗教は我々の本性を知つたことが必要である。その宗教は偉大と卑小とを知りまた偉大の理由、卑小の理由を知つたのでなければならぬ。キリスト教を除いていかなる宗教がそれを知つてゐたであらうか。

四三四 ビュロンの徒の主要なるちからは、ごく些細なるものはさておいて、つぎのやうなところにあ



る、すなはち\*信仰と啓示とを除いては\*我々は、これらの原理の眞理性に關しては、それらの原理をし  
ぜんに我々のうちに感ずる\*といふこと\*以外には、なにも確實なるものを持たない、といふところにあ  
る。ところでこのしぜんな感じといふものはこれらの原理\*の眞理性\*をなつとくせしめうる證據にはな  
らない。なぜといつて人間が創造せられたのは善い神によつてであるか悪魔によつてであるか偶然にであ  
るか信仰以外には確實性がないのであるから、さうしてみるとこれらの原理が——我々の起原の如何に  
従つて——眞なるものとしてあたへられたものか偽なるものとしてあたへられたものかそれとも不確實な  
ものとしてあたへられたものかその點疑はしいからである。

そのうへ睡眠中にせい一ぱい確かに目ざめてゐるとおもふことがあるのを見ると、誰も、自分が目ざめ  
てゐるのかそれとも眠つてゐるのかについては\*信仰以外に\*確證をもたない。

我々は空間、形、運動を見てゐるやうにおもふし、時の流れを感じてこれを計りもする。つまるところ  
目ざめてゐると同様にして活動するのである。従つて人生の半分はこの眠りのうちに過されるのでありこ  
の眠りにおいては、我々みづからの告白するところによると、眞理の觀念をもつてゐるやうにおもひはす  
るけれども實は眞理のなごらの觀念をもたないのであり、そのとき我々のすべての思ひはまほろしにほ  
かならぬものであるとしてみれば、我々が目ざめてゐるとおもつてゐるこのもう半分の人生だつて、眠つ  
てゐる目のさめるあの前にのべた眠りと多少はちがふものではあらうが、これまた一つの眠りであるので  
はなからうか。

〔またもし人が仲間の者ととも眠り、夢が、これは\*かなり\*ありふれたことだが、偶然一致すると

するならば、さうして目のさめてゐるときは孤りほつちであるとするならば、この人はものごとを逆に考  
へるにちがひあるまい。最後に、我々はしばしば一つの夢の中にもう一つの夢を孕ませ夢の中で夢をみて  
ゐることがあるがちやうどそのやうに、目ざめてゐるとおもつてゐるこの人生そのものが一つの夢にほか  
ならぬものであり、この夢にほかのかすかすの夢が接ぎ木せられてゆくのであり、死ぬときに我々はこれ  
から目ざめるが、それまでは、しぜんの睡眠中におけると同じく、ほとんど眞についても善についても原  
理をもたないといふさういふことは、ありえないであらうか、この人生において我々をうごかすところの  
さまざまの想念も、おそらくは、時の流れに似、夢のむなし<sup>T</sup>い妄想に似たまほろしにすぎないのであつて  
みれば〕

これが双方のがはの主要なるちからである。

私は、習慣であるとか教育であるとか國々の風俗であるとかそのほかさういふものの印象に抗してピ  
ロンの徒のなすところのぎろんのやうな、ごくさいなものはうちすてる。それらの印象は、かのむなし  
い根柢の上に立つて獨斷的に論ずる\*にすぎない\*一般の人々の最も多くをひきよせるものであるが、ピ  
ュロンの徒のいかにかろやかなる息吹きにも吹きまくられるものである。\*これのよく納得できない人は<sup>B</sup>  
ピュロンの徒の著した書物を見さへすればよい。人はすぐに納得するであらう、おそらく納得しすぎるで  
あらう\*

人は誠意をもつてまじめに語るかぎり自然の諸原理を疑ふことはできないといふ獨斷論者の唯一のちか  
らを私はここでとりあつかふにとどめよう。これに抗しピュロンの徒は\*一口でいへば\*我々の起原の不



確實性を立てる、これには我々の本性の不確實性といふこともふくまれてゐる。これに對し獨斷論者たちはこの世が始まつて以來今だに答辯をつづけてゐる。

そこで人々のあひだに戦ひがひらかれ、各人は意を決し獨斷論者にくみするかピュロンにくみするか必ずどちらかにしなければならぬ、なぜなら中立にとどまらうとおもふ者はすぐれたるピュロンの徒となるであらうから。この中立といふことは\*この徒の\*特性であり、この徒に反對しないものはいつばにこの徒に味方するのである\*ここにこの徒の得な點があらはれる\*この人々はこの人々自身にも頼らない。この人々は例外なくあらゆることに對して中立し、無關心であり、不安定である。

それならばこの状態において人間はなにをなさうとするのか。人間は一切を疑ふことになるのであらうか。彼は彼が老いてゆくこと、抓つかられること、焼かれることを疑ふのであらうか、彼は彼が存在すること  
を疑ふのであらうか。\*そこまで\*ゆくことはできない。しんからの完全なピュロンの徒はかつて一人も  
ゐなかつたことを私は尤ものことだとおもふ。自然は我々の\*無能なる\*理性をささへてくれる、さうし  
て理性がさほどにまで度をはづさうとするならばそれを引きとめてくれる。

それならば反對に人間は眞理を確實につかんでゐるといふのか、——すこしでも挑いまれるならばもう眞  
理のなにの由來をも示すことができなくなり、つかんでゐるものを手放すよりほかはなくなるところの人  
間が。

さうしてみると人間とは何といふ奇怪なる獣であらうか。何といふ珍奇、何といふ妖怪、何といふ混沌、  
何といふ矛盾の者、何といふふしぎの者であらうか。あらゆるものの裁き手、おろかなるみみず、眞理の

受託者、不確實とあやまりのごみすて場、宇宙の榮譽にして屑物！

誰がこのもつれを解くのか。

ピュロンの徒は自然を窒息せしめざるを得ず、獨斷論者は理性を放棄せざるを得ない。コノ一行T

自然はピュロンの徒を困惑せしめ、理性は獨斷論者を困惑せしめる。

お、自己のままことの状態がいかなるものであるかを自然的なる理性にたよつて尋ねる人々よ、諸君は  
一たいどうなるのであるか。諸君はこれらの學派のいづれをもさけることはできない、またいづれのうち  
に住まふこともできない。

されば高ぶれる者よ、諸君は諸君自身にとりいかなる逆説パラドクスであるかを知るがよい！ 無能なる理性よ、  
へりくだるがよい！ おろかなる本性よ、黙るがよい！ 人間がかぎりなく人間を越えることをまなぶが  
よい。さうして諸君の知らぬまことの諸君の在り方を諸君の主しゅよりをしへられよ。

神に耳をかたむけよ！

なぜといふのに要するに、もし人間が墮落しなかつたのならばその無垢のうちにあるて確實に眞理をも至  
福をも受けてたのしんでゐることであらう。またもし人間が墮落しきつたのであるならば眞理とか至福と  
かいふものをまるで知らずにあるであらう。しかし我々は不幸である。我々が我々の存在の仕方の中に  
すこしも偉大性をもたないであらうよりは反つてさらに我々は不幸である。我々は幸福といふものを知つ  
てをりしかもそれに到達することができないのである。我々は眞理の影を感知してをりしかも虚偽をし  
持つことがないのである。



全然無知であることもできず確實に知ることできない我々は、完全の一階位にゐたのが不幸にもそこから落ちたのであることはきはめて明らかである。

とはいへ我々の認識から最も遠いところにあるこの神祕、罪の繼承といふこの神祕は、これなくしては我々自身について我々は何らの認識をももつことのできないところのものであり、これはおどろくべきことである！

なぜならそれはおそらく、最初の一人の人間の犯した罪のゆゑに、その原罪からずるぶん遠くへだたつてゐてそれにあづかるなどとはおもはれないほどの人々までも罪ある者となつたといふことほどに、我々の理性を腹立たしめることはまたとないからであらう。この繼承は我々にとつてありうべきことでないやうにおもはれるのみならずはだ不正のこのやうにさへおもはれる、なぜといふのに意志を持ちえぬ幼な兒を、その幼な兒の生れてくる六千年も前に犯されたのであるからには一向にこの幼な兒のあづかり知らぬものやうにおもはれるところの一つの罪のゆゑに、永遠に有罪と決めてしまふといふことほど、我々のみじめな正義の規準にさからふことがあらうか。たしかにこの教説ほどひどく我々をきづつけるものはない。とはいへすべてのものうち最も不可解なるこの神祕なくしては我々は我々自身にとつて不可解となるのである。我々の存在の仕方はこの神祕境においてその縫れに皺とねぢれをつくる。かうして人間は、この神祕なくしては、この神祕が人間にとつて不可解である以上に、不可解である。

「\*さういふところから\*神は、我々には分らない我々の存在の仕方の難問を我々に與へようとして、その縫れを我々のとどかないほど高いところに、といふよりはむしろ低いところに隠したまうたやうにお

もはれる。従つて眞に我々を知ることができるのは理性の高慢なる活動によつてではなく反つて理性のすなほな服従によつてである。

これらの論據はこの宗教の犯すべからざる權威の上にしつかりとうち樹てられてゐるものであるがこれらの論據によつて我々は、どちらもひとしく不易であるところの信仰の二つの眞理があることををしへられる、すなはちその一つは、創造或は恩寵の状態にあつては人間は全自然を越えて高くあげられ\*神に似たるもの神性にあづかるものとせられてゐる\*といふ眞理であり、もう一つは、墮落\*と罪\*の状態において人間は右の状態から轉落したものであり獸にひとしいものとせられてゐるといふ眞理である。

この二つの命題はいづれもひとしく堅固にして確實である。

聖書はそのいくつかの箇處でこれらの命題をはつきりと公言してくれしめる。Deliciae meae esse cum filiis hominum. Effundam spiritum meum super omnem carnem. \* Dii estis, \* etc. またほかの處で Omnis caro fenum. Homo assimilatus est jumentis insipientibus, et similis factus est illis. Dixi in corde meo de filiis hominum. \* Eccl. III. \*

人間は恩寵によつて神に似たるもの神性にあづかれるものとせられること、また人間は恩寵なくして野獸にひとしきものであると考へられること、さういふことがこれによつてはつきりする」

(一)「わが楽しみは人の子らとともにをるにあり」箴言八ノ三一。神のちゑが、ソロモンの口をかりてさう語つてゐる (二)「わが靈をすべての人々にそがん」ヨエル書二ノ二八。主が、預言者の口をかりてさう語つてゐる (三)「汝らは神なり」詩篇八二ノ六。作者が審判をおこなふ者たちに向つてこのことをのべてゐる



(四)「人はみな草なり」イザヤ書四〇ノ六 (五)「人は思ひなき獸にくらべられこの類ひとなりぬ」詩篇四八ノ一三と二一。現行邦譯の聖書には詩篇四九ノ一二に「されど人は響はびのなかに永くとどまらず亡びうする獸のごとし」とあり、同四九ノ二〇に「尊貴たふさなかにありてさとらざる人は、ほろびうする獸のごとし」とある

(六)「われまた心にいひけらくこのことあるはこの世の人のためなり、すなはち神はかく世の人をためしてこれにその獸のごとくなることをみづからさとらしめたまふなり」傳道書三ノ一八。

四三五 これらのきよき認識をもたぬ人々は、過去の偉大さのこした内なる感情によつて高ぶるか現在のよわさをながめて卑下するか、どちらか以外に何ができたらうか。

おもふに人々は眞理の全體を見なかつたためにまつたき徳にとどくことができなかつた。ある人々は本性を墮落したものでないと考へ、ある人々は本性をいやしえぬものであると考へて、あらゆる罪のみなもとであるところの高慢をまぬがれることができず怠惰をまぬがれることができなかつた。怠惰によつてそれにひたるか高慢によつてそこから出るかいつれかのほかはなかつたからである。なぜなら人々は人間の優越性を知つてゐたとしても人間の墮落を知らなかつた、それゆゑによく怠惰をさけた、が高慢におほれた。また人々は本性のよわさを知つてゐたとしても本性のそんけんを知らなかつた、それゆゑによく虚妄をさけた、が絶望のふちにおちた。

ストア派、エピクロス派、また獨斷論者、アカデミア派など種々の學派はここから生れる。

ただキリスト教のみが、地上のちゑに頼つて一をもつて他を逐ふことにおいてでなく、福音の純一性に

よつて一をも他をも逐ふことにおいて、これら二つの缺陷をいやすことができた。なぜならキリスト教は義人に向ひ、神性にあづかるにいたるまでに彼らをキリスト教は高めること、さうしてこの至高の状態においてもなほ彼らはあらゆる墮落のみなもとをもち、生せいあるかぎりは誤謬と悲惨と死と罪とにおちいることをまぬがれることのできないものであることををしへ、またいかに信仰をもたぬ者に向つても、贖あがなひ主の恩寵をうけることができるといふことを聲高く説くからである。かやうにしてキリスト教は、それが義とする人々にはおののきをあたへそれが罪ありとする人々にはなぐさめをあたへながら、萬人に共有なるこの恩寵と原罪といふ二重の能力をとほして、じつに正當な仕方で恐怖を希望でやはらげてくれる、それはじつに正當な仕方であつて、理性がひとりでなしうるよりははるかに強く卑しめる、が絶望はさせない、また、本性の高慢がなしうるよりははるかにたかく高める、が高ぶらせはしないのである。さうしてかやうにして、この宗教こそ誤謬と不徳とにおちいることのない唯一のものであり、人間ををしへることもただすこともこの宗教のみのなしうることであるといふことを、これによつて十分にさとらしめるのである。

さうしてみるとこれらのきよき光を信じあがめることを誰が拒むことができようか。なぜなら我々が優位性のけしがたい性質を我々のうちに感ずるといふことは眞晝よりも明らかでないか。また我々が我々のかなしむべき存在の仕方のかずかずの結果をつねに感ずるといふこともほんたうのことではないであらうか。

この混沌とこの奇怪なるこんらんとは双むかふことのできぬほどつよいこゑでこれら二つの状態の眞相



以外の何を叫んでるようか。

缺陷

四三六 人々の専念することがらはすべて、富をもたうとすることである。が人々はそれの所有が正當であるといふことを證明すると、その理由をあけることはできないであらう。なぜといふのに人々は人間的氣まぐれをしかもたないからであり、またそれを確實に所有するためのちからをもたないからである。學問についても同じである。なぜなら病氣はそれをうばひさつてしまふ。我々には眞をもつ能力もなく、善をもつ能力もない。

四三六ノ二 人々の専念することがらはすべて、富をもたうとすることである。が人々はそれらの所有が正當であることを證明するところの理由をあけることもないし、それを確實に所有するためのちからをもつこともない。學問についても快樂についても同じことである。我々は眞理をもたず善をもたない。

四三七 我々は眞理をのぞむ、さうして我々のうちに不安をしか見出さない。

我々は幸福をもとめる、さうしてみじめさと死とをしか見出さない。

我々は眞理と幸福とをのぞまないでゐることはできない。さうして確實をもつちからもなく幸福をもつちからもない。我々を罰するために、また我々がどこから落ちたかを感じせしめるために、この欲求は我

我のうちにのこされてゐる。

四三八 人間が神のためにつくられてゐないのであるならばなにゆゑに人間は神についてのほか幸福ではないのであるか。人間が神のためにつくられてゐるのであるならばなにゆゑに人間はさやうにも神と相反するのであるか。

墮落した本性

四三九 人間は、人間の存在をつくつてゐる理性によつては、すこしも行動しない。(一)

(一) 理性は人間の存在をつくつてゐる、しかしそれは本來的状態においてのこと、つまり被造物の墮落以前においてのことである。そのとき理性はまったく正しかつた、がそれ以後はゆがみうちすてられてゐる。ラロシニフウコーの格言六二に「どこまでも理性に従ひぬくといふほどのちからは我々にはない」

四四〇 理性の墮落といふことはかくも雑多なさうして無法な習俗をみれば分る。人間が人間のうちに住まはなくなるためには眞理の到來することが必要であつた。

四四一 私はといへばかう告白する。人間の本性が神よりおちて腐敗したといふこの原理をキリスト教からをしへられるやいなや、私はこの眞理のしるしをいたるところに見る眼をひらいてもらつたと。なぜと



いつて自然は、人間のうちにおいても人間の外においてもいたるところにおいて、迷へる神を、墮落した本性を指ししめしてくれるのである。

四四二 人間のまことの本性、まことの善、まことの徳、まことの宗教は、この認識と切りはなすことのできないものである。

偉大 みじめさ

四四三 人は光をもつにおうじて、人間のうちに、より多くの偉大と、より多くの卑小とを發見する。

ふつうの人々。

さらに高い人々。

哲學者たち。

この人々はふつうの人々をおどろかす。

キリスト教徒、このキリスト教徒は哲學者たちをおどろかす。

かくて、光を多くもつにおうじてそれだけ多く人の認めるところのものを、我々の宗教にいたつては根

本的に認めさせてくれるばかりであるといふことを知つて、誰かあやしむ者があらうか。

四四四 人々がその人々の持てるかぎりの知力をもつて認めることのできたものを、この宗教はその子らにをしへたのである。

四四五 原罪は人々にとつては狂氣とせられる、しかしそれは狂氣としてあたへられてゐるのである。従つて諸君はこの教説に道理の缺けてゐるのゆゑをもつて私をひなんしてはならない、なぜといつて私はこの教説を道理なくして存在するところのものとして説くのであるから。しかしこの狂氣は人々のちよ<sup>(1)</sup>りも賢いのである *Sapientius est hominibus*。なぜならこの狂氣をぬきにして人間の存在は何の意味をもちえようか。すべて人間の在り方はこの感知がたい一點に存在してゐる。いかにしてこの一點が人間の理性によつて認められえようか、だつてこのものは人間の理性に反するところのものであり、また人間の理性はそれの方法によつてこのものをさぐりとりどころか、このものの面前に出るとしりごみをしてしまふのであるからには。

(一) 「人よりも賢し」コリント前書一ノ二五に「神の愚は人よりも賢く、神の弱きは人よりも強し」

四四六 原罪について。ユダヤ人は原罪を十分に傳達する。

創世紀第八章のことば、人の心の成り立ちはその幼き時より悪し<sup>(1)</sup>つづつ。R. Moise Haddarschan.



この悪い酵母は人間がつくられた時以来人間のなかにはいつてゐる。

Massechet Succa. この悪い酵母は聖書では七つの名前をもつてゐる。すなはち悪、包皮、けがれ、敵、つまづき、石の心、北風とよばれてゐる。これらはすべて、人間の心に隠され刻みこまれてゐる邪惡のことである。

Midrach Tillim も同じことをのべてをり神は人間のよい本性を悪い本性より救ふであらうと語つてゐる。

この邪惡は毎日人間に向つてそのちからを新たにす、ちやうど詩篇三七にかうあるやうに。「悪しきものは義しきものをひそみうかがひてこれを殺さんとはかる、されどエホバは義しきを悪しきもの手に残しおきたまはず<sup>(一)</sup>」。この邪惡は人間の心を、この世においては誘惑し、あの世においては責めるであらう。ちやうどはすべてタルムッドにしろされてゐる。

Midrach Tillim. 詩篇四のことば「汝らつつしみをのきて罪を犯すなかれ<sup>(三)</sup>」について。汝らの邪欲につつしみをのきてこれをおそれよ、さうすれば邪欲は汝らを罪にいざなふことがないであらう。また詩篇三六のことば「悪しきものの愆<sup>(四)</sup>は、心のうちに語りて、神をおそるおそれわが前にあることなしといふ<sup>(四)</sup>」について。すなはち人間本來の邪惡が信仰をもたぬ者に向つてさう語つたといふこと。

Midrach el Kohélet. 「貧しくして賢き子供は、老いておろかにしていさめをいれざる王にまさる<sup>(五)</sup>」子供は徳であり王は人間の邪惡である。邪惡は王とよばれる、なぜならすべての肢<sup>(六)</sup>はこれに従ふからである。また老いたるものとよばれる、なぜならこれは幼時より老年にいたるまで人間の心のうちにゐるからである。またおろかとよばれる、なぜならこれはすこしも人間のあらかじめさとらぬ<sup>(七)</sup>の路に人間をみちびくからである。

これと同じことが Midrach Tillim のうちにみられる。  
Bereschit Rabba. 詩篇三五「わがすべての骨は汝をたたへん、汝は貧しき者を、かすめうばふ者より助けたまふがゆゑに<sup>(六)</sup>」について。悪い酵母よりも大なる掠奪者がゐるであらうか。——また箴言二五

「汝の仇もし飢ゑなば<sup>(七)</sup>これに糧を食はせよ<sup>(七)</sup>」について。すなはちもし悪い酵母が飢ゑるならば箴言九に語られてゐるところのちゑのパンをこれにあたへ、もし渴くならばイザヤ五五に語られてゐるところの水をこれにあたへよ。

Midrach Tillim も同じことをのべてゐる。聖書はこの箇處において我々の敵のことを語つてゐるがそれは悪い酵母を意味してゐることをものべてゐるし、またこれにパンと水とを「あたへることは<sup>(八)</sup>」これのためにその頭の上に炭をよせあつめてやるやうなものであるといふことをものべてゐる。

Midrach el Kohélet. 傳道書九の「大なる王小さき村をとりかこみたり<sup>(九)</sup>」について。この大なる王とは悪い酵母のことでありこの王が村をとりかこんだところの大なる道具とは誘惑のことである。さうしてそこに貧しい一賢者すなはち徳があらはれてこの村を救ふ。

また詩篇四一の「よわき人をかへりみる者は幸ひなり<sup>(一〇)</sup>」について。

また詩篇七八の「靈は去りゆきてふたたびかへらず」について。ある人々はこのことばを誤つてとり、靈魂の不滅に反對する依りどころとした。しかしこの靈といふのは悪い酵母のことであつて、人間の死ぬ



まで人間とともにゆくが復活のときにはもう戻つて来ないといふ意味である。

また詩篇一〇三について同じこと。

また詩篇一六について。

ラビニスムの原理。二人の救世主。

- (一) 創世八ノ二一 (二) 詩篇三七ノ三二 (三) 詩篇四ノ四 (四) 詩篇三六ノ一 (五) 傳道書四ノ一三  
(六) 詩篇三五ノ一〇 (七) 箴言二五ノ二一 (八) 傳道書九ノ一四 (九) 道具——聖書の語るところによれば「大いなる雲梯かきだを建てたり」とある。雲梯といふのは包圍者が城壁を崩すときに用ひる木造りの保壘のやうなものであらうか。傳道書九ノ一四—一六を参照 (一〇) 詩篇四一ノ一

四四七 正義は地を拂つたと人々はのべたがゆゑに、人々は原罪を知つた、といはれるであらうか——

Nemo ante obitum beatus est. <sup>(1)</sup>永遠にして本質的な至福が死においてはじまるといふことを人々は知つた、といふことになるであらうか。<sup>T</sup>

(一)「死ぬまでは何者も幸福でない」モンテーニュ一ノ一八に引用せられたオヴィディウス (Ovide, *Métamorphoses*, III, 135) の回想。

四四八 「ミトン」<sup>B T</sup> は本性が墮落したものであることをまた人間が徳にそむくものであることをよく心得てゐる。しかしなぜ人間はもつと高く飛ぶことができないかを知らない。

#### 順序

四四九 墮落のあとに次ぎのやうにいふこと。この状態にある人々はこれをよろこぶ人々\*も\*これをいとふ人々\*も\*すべての者がこれを承知してゐるとすることは正しい。しかしすべての者が罪の贖あがなひを理解するといふなら、それは正しくない。

四五〇 もし自己が高慢と野心と邪欲とよわさとみじめさと不正とに満ちてゐることを知らないならば、その人はまさしく盲目である。もし\*そのことを知りながら\*そこから救はれることをねがはないならば<sup>T(1)</sup> (……)人間について何をいふことができようか。

かくて我々はただ、人間の缺陷をかやうにもよく知つてくれる宗教にそんけいをはらひ、かやうにも望ましい救ひを約束してくれる宗教の眞理性を追求しようとながらふばかりである。

(一) Chevalier 版 P. 232 はこのところを想像して (かほどにも理性を缺いた) 人間について何をいふことができようかと補つてゐる。

四五一 すべての人間はお互ひに自然的にきらひあふ。人は邪欲をできうるかぎり用ひておほやけの幸福に役立てようとした。しかしそれはさう見せかけるのにすぎない。それは慈愛らしくいつはるかかけほうしにすぎない。なぜといつてそれは根柢においては嫌悪にほかならない。



四五二 不幸な人々をあはれむのは邪欲を制することによつてではない。反つて人は、愛情のしるしをあ  
たへるのを、また何もあたへないで親切の評判を立てられるのを、大いによろこぶものである。(二)

(一) ラロシュフコーの格言に「親友の不遇に何かしら不快になれないものがある」(『格言集』初版)。「友  
人の不幸も、それがこちらの愛情をしめしてやるのに役立つときには、らくになぐさめがつく」(初版及びそれ  
以下の版)。また「敵の不幸をあはれむのは親切だからではなく高慢だからであることがしばしばある。同情  
を示すのはこちらが相手より高みにあることを知らしてやりたいからである」(第五版)

四五三 人間は邪欲から政治や道徳や\*正義\*のすばらしい規則をひき出してこれをうち樹てた。しかし  
人間のこのみにくい根、<sup>(1)</sup>の *figmentum malum* はじつさいはただおほはれたのたすぎない。むしろと  
られたのではない。<sup>(2)</sup>

(一) *figmentum* と云ふ表現は *Vulgata* にある。 *quoniam ipse cognovit figmentum nostrum*. 詩篇一〇  
二ノ一四 (二) *パスカル* は *ミトン* が禮義 *honnêteté* を定義して「よく規制せられたる自愛心」とのへたこ  
とを回想してある。じつによい定義ではないか。

不正

四五四 彼らは、ほかの人々に害をあたへないで邪欲を満足させるといふ方法を、見つけることができな  
かった。

四五五 自我は厭ふべきものである。ミトンよ、自我をおほうてみるがよい、おほうたからとて取り除か  
れるわけではない。それゆゑに君はやはりいとふべきものである。

——いい決してさうではない。なぜならちやうど我々のしてゐるやうにすべての人に深切をおこなふ  
ならば人はもう我々をきらふわけがない。——それはさうだ、もし自我のうち我々の受けとるところの不快  
な點だけをいとふといふのであるならば、それはほんたうである。

しかしもし自我があらゆるものを中心となることは正しくないことであるといふ理由で自我をいとふの  
であるならば、私はやはり自我をいとふことにならう。

要するに自我は二つの特質をもつてゐる、すなはちそれはそれ自身が正しいものではない、なぜならそ  
れはあらゆるものを中心になるから。またそれはほかの人々にとつて不快である、なぜならそれはその人  
人を服従せしめようとのぞむから。おもふにおのおのの自我は敵であり、ほかのあらゆるものに暴君とし  
てのぞまうとする。君はそこから不快を取り除くといふ、がしかし不正を取り除くことはできない。

だから君は自我の不正をいとふ人々に對しては自我を愛すべきものとすることは\*ない\*。君は不正の  
人々に對してのみ自我を愛すべきものとするであらう、そこにもう自分の敵を見とめなくなつてゐるとこ  
ろの不正の人々に對してのみ。従つて君は不正にとどまる、さうして不正の人々をしか喜ばせることはで  
きない。

四五六 誰もかれもが自己をほかのすべての人々の上にすゑ、また自分自身の富、自分の幸福、自分の壽



命をほかのすべての人々のそれらよりも愛するとは、何といふ狂つた判断！

四五七 人はそれぞれその人自身にとつて一切である。なぜといふのに自分が死ぬならばすべてのものが自分にとつて死ぬからである。<sup>(一)</sup> さやうなわけで各人は自分をすべての人に對するすべてのものと信ずるものである。我々は自然を我々に従つて判断すべきではない、自然に従つて判断すべきである。

(一) モンテーニユ二ノ一三「我々はすべてのものを曳きずつてゐる、だから我々の死を一大事にする」

四五八 「おほよそ世にあるものは肉の欲、眼の欲、生命の誇なり」 *libido sentiendi, libido sciendi, libido dominandi.* <sup>(一)</sup> これら三つの火の川のうるほすといふよりはむしろ焼きこがす呪ひの土地はわざはひなるかな！ これらの川の上にあるながら沈むことなく流されることなく反つて確平としてうごかず、川の上に立つのでなく川の低い安全な場所にすわつてゐて、光の到るまではここより身をおこすことがないが、しかしやすらかにここにいらつたのちには、もう高慢のためにせめられ打ちふせられることのない聖いエルサレムの宮の入口のうちにゆるぎなく立たしめようとしてひきおこしてくれるところの者に手を差しさへる人々、しかしながら、すべての亡ぶべきものが早瀬にひきこまれ流されてゆくのを見るがゆゑにはなく長く異郷にあつて絶えず心にかべたところのなつかしいふるさと聖きエルサレムをおもふがゆゑに涙をながす人々は、さいはひなるかな！

(一) ヨハネ第一書二ノ一六「おほよそ世にあるものすなはち肉の欲・眼の欲・所有の誇などは御父より出づ

るにあらざ世より出づるなり」

四五九 「バビロンの川は流れ、くだり、ひきいれる。

お、聖なるシオン、そこではすべてはゆるがない、そこではなにもも崩れることがない！

川の上にはすわらなければならぬ。川の下にでもなく中にでもなく上に。さうして立つてゐてはならない、すわらなければならぬ。へりくだるためにすわるのであり、安全であるために上にあるのだ。しかしエルサレムの宮の入口のうちに我々は立つことであらう。

このよろこびがゆるぎないものであるか流れゆくものであるかを見るがよい。もし過ぎゆくものであるならばそれはバビロンの川である<sup>(一)</sup>

(一) この断章は詩篇一三七ノ一「われらバビロンの川のほとりにすわりシオンを思ひいでて涙をながしぬ」に對する聖アウグスティヌスの註釋を反譯したもの。

四六〇 肉の欲、眼の欲、……の誇。

事物に三つの秩序 *ordre* がある、すなはち、身體、精神、意志。

身體的なるものは富者であり王者である。この人々は對象として體を持つてゐる。



求知者と學者、この人々は対象として精神を持つてゐる。

賢者、この人々は対象として正義を持つてゐる。

神はすべてを治めたまふべきでありすべては神に戻るべきである。身體のことからは邪欲が適切に\*治める。精神的なことからにおいては求知心が適切に治め、ちゑにおいては、誇りが適切に治める。

\*富をもつこと或は知識をもつことをもつて誇りとすることができないといふのではない、ただそこが自負の出る場所ではないといふのである。なぜといつて我々は、或る人が學者であることはゆるすとしても、自負するのはまちがひであることをもつてその人をなつとくせしめることは依然としてやめないであらう\*

\*自負の出る適切な場所はちゑである。なぜなら我々は、或る人が賢者となりえたことを認めながら、誇るのはまちがひつてゐるといふことを認めるといふわけにはゆかないからである。なぜなら誇るのは正當である\*

\*だから神のみがちゑを興へたまふ\*。\*さうしてそれゆゑに\* Qui gloriatur, in Domino gloriatur\*  
(1)

(一)「誇る者は主によりて誇るべし」コリント前1ノ三一。

四六一 三つの邪欲は三つの派をこしらへた、さうして哲學者たちはこれら三つの欲の一つに従ふことの

ほかはしなかつた。

まことの善の探求

四六二 一般人は善を富のうちに、また外面的なる善のうちに置き、あるひはすくなくとも慰戯のうちに置く。哲學者たちはそれらのものがいづれも空なることを示し、善を彼らの置きうるところに置いた。

〔イエス・キリストなしに神を持つてゐる哲學者たちに對して〕

四六三 哲學者たち。——彼らは神のみが愛せられあがめられるに値ひする\*ことを\*信じてゐる、しかも自分たちが人々から愛せられあがめられることを望んだ。彼らは彼らの墮落を知らないのである。もし彼らが神を愛し神をあがめるところに満ちてゐるところの自分を感じそこに彼らのおもなるよろこびをおほえるのであるならばなにより結構なことである！ 彼らは自分を善良だと評價するがよい。しかしもしそこに嫌悪をおほえ、ただもう人々からそれけいを受ける自分になりたいとのぞむほかには何の意向も持たないのであるならば、さうしてただもう彼ら哲學者たちを愛することが幸福になれることであるといふことを人々に、強ひることなく、信ぜしめることを何よりの完成であるとするのであるならば、私はこの完成をいとふべきものであるといはう。なんといふことだ！ 彼らは神を知つた、しかも彼らは人々をして神を愛せしめることのみをひたすらにねがはうとしなかつた、\*反つて\*人々をして彼ら哲學者たち



に足をとどめしめることのみをひたすらにねがった！ 彼らは人々の氣ままな幸福の対象となることをのぞんだのである！

(一) 初版はこの断章をつぎのやうなことで始めてゐる「プラトン派の人々すすんではエピクテトスおよびその流派の人々は……」

四六四 哲學者たち<sup>B</sup>——我々は我々を外へつきやる事物に満ちてゐる。

我々の本能は幸福を我々の外に求めなければならぬとつけてくれる。我々の欲情はこれをかきたるところの事物が現れ出ないときでさへ、我々を外へ押しやる。外なる事物は外なる事物で我々をいざなひ、我々の氣づいてゐないときでさへ、我々をまねいてゐる。従つて哲學者たちは「汝自身のうちにかへれ、そこに汝らの善を見出すであらう」とのべても無益である。ひとは彼らを信じない。彼らを信ずる人は最もむなしく最もおろかなる人々である。

四六五 ストア派の人々はいふ「汝自身のうちにかへれ、そこにこそいこひを見出すであらう」と。これはほんたうではない。

またある人々はいふ「外に出よ、氣ばらしのうちに幸福を求めよ」と。これはほんたうではない。病氣がやつて来る。

幸福は我々の外にもなく我々のうちにもない。幸福は神においてある。我々の外とうちとにある。

哲學者たち

四六六 エピクテトスは道を完全に知つた\*とき\*人々にいつた「諸君は間違つた道を歩いてゐる」と。エピクテトスはほかに一つの道のあることを明示してくれる、しかしそれへみちびいてはくれない。それは神の望みたまふことがらをのぞむところの道であり、イエス・キリストのみがそれへみちびいてくださる。 <sup>(1)</sup> Via, veritas.

ゼノンの不徳。<sup>(2)</sup>

(一) ヨハネ一四ノ六「イエス彼にいひたまふ『我は道なり真理なり生命なり我によらでは誰にても父の御許にいたる者なし』」(二) このことは寫本にだけある。どういふ意味かよくは分らない。

現實の理由

四六七 エピクテトス。「君は頭痛がしてゐる……<sup>(1)</sup>」といふ人々。そのばあひはちがふ。我々は健康について確信がある、しかし正義については自信がない。じつさい彼のいふ正義はばかけたものであつた。それにも關らず「我々の能力のおよぶところにあるものかそれともないものか」とのべるのを見て分るやうに彼は正義を證明せられうるものとおもつてゐた。しかし心情を規制するからには我々にはないといふことに彼は氣づかなかつた。さうして、幾人かのキリスト教徒のゐることをもつてこれを結論したのは、



彼の誤りであつた。<sup>(二)</sup>

(一) 斷章八〇を参照 (二) 斷章三五〇を参照

四六八 ほかのどんな宗教も人々に向つて自己をいとふやうにすすめなかつた。従つてほかのどんな宗教も自己をいとうて眞に愛すべき存在者を求めようとする人々にはよろこばれなかつた。この人々は、この謙虚なる神の宗教ならば、まだ一度もひとから聞いたことがなかつたとしても、すぐに奉ずるにちがひない。

四六九 私は自分がまつたく存在しなかつたかもしれないことをおもふ、なぜなら自分といふものは私の意識において在るのであるから。ゆゑにもし私の母が私の生れるまへに殺されてゐたとするならば意識する私といふものは存在しなかつたであらう。従つて私は必然的な存在ではない。私はまた永遠でもなく無限でもない。しかし自然のうちには、必然にして、永遠にして、無限なる存在がある、私にはそのことがよく分る。

四七〇 「もしふしぎを見たのであつたならば回心するのだが」さう彼らはいふ。一たい自分の知りもしないことをきつとするなどと、どうして彼らはうけあふことができるのであらうか。回心とは彼ら流の想像による\*交通\*<sup>まじはり</sup>および對話としての神ををがむところであるとさう彼らは考へてゐる。しかしまことの

回心とは、人間がいくたびといふことなく怒らしめたところのさうして人間をいつであらうと掟になつてうちひしぐことのできるころの普遍的存在者のまへに身をなきものとするところにある。また自分はこの存在者なくしてはなにごとでもできないこと、自分はこの存在者の寵愛を失ふに値ひしただけの人間にすぎないことを認めることにある。まことの回心とは、神と我々とのあひだにはとりのぞくことのできない\*一つの\*對立があり、仲介者なくして交通<sup>まじはり</sup>はありえないといふことを知ることにある。

四七一 人が私に愛著するとしたらそれは正しいことではない、たとへその愛著が喜びをもつて自發的になされたとしても。私がもし或る人々をして私に愛著せしめるとしたら私はこの人々を裏切ることになるであらう、なぜといつて私は誰の目的でもありえないし、その人々を満足させるのに十分なものをもつてもあないのであるから。私はやがて死ぬ身ではないか。さうしてみればその人々の愛著の對象は死ぬことになる。だからかりに私が嘘を人に信ぜしめるとしたら、いくらやさしく納得させたにせよ、いくら喜んで信じてくれたにせよ、またいくらそれを私が喜んだにせよ、私は嘘を信ぜしめるといふ罪をかすであらう、それと同じことで、人々をして私を愛せしめることは罪である。さうして例へばここにいつはりに同意しようとしてゐる人々があるとしたら、どんな利益にあづかれさうでも、私はその人々にいつはりを信じてはならぬと忠告してやらなければならぬと同様に、もし私にひかれて私に愛著しようとする人があるとしたら、愛著してはならぬと私は忠告してやらなければならぬ。なぜならその人々は神をよろこばせること或は神をたづねるとめることに彼らの人生と彼らの心づかひとをつひやさなければならぬ



いのであるから。<sup>(二)</sup>

(一)「愛せられたいとおもふころには明らかに不正なものがある」ニール Essais de Morale, t. II, p. 120.

(二)この原文は寫本だけのこつてゐる。その寫し手はふつうドマだといはれてゐるがT版の註によれば筆蹟は「向ドマのものに似てゐないといふ。」

四七二 固有の意志<sup>(一)</sup>はそれののぞむあらゆるものの上に支配力をえたにしても決して満足するにはいたらぬであらう。しかし人は、これをすてた瞬間から満足する。これをすてさへしたら、人は不満足であることができない。これに頼るなら、人は満足することができない。

(一) 固有の意志 *volonté propre*——「マラギウスふうの意味のことば。神から来る恩寵と對立して我々から出るところの意志。」

四七三 考へる手足を一ぱいもつてゐる一つの身體を想像していただきたい。

手 足

ここからはじめること

四七四 我々が我々自身に源をもつところの愛を規制しようとするならばそのためには、我々は全體にとりその手足にあたるわけであるから、考へる手足を一ぱいもつてゐる一つの身體を想像すればよい、さう

してそれぞれの手足はいかにして愛しあふものか……などのことを見るとよい。

四七五 もし手足がそれぞれに固有の意志をもつてゐるとしたならば、全身體を治める第一の意志にその固有の意志を服従せしめることにおいてのほかそれらの手足はそれらの秩序を保つことはできないであらう。それをよそにするならばそれらは無秩序と不幸とにおちいるであらう。だつてひたすら身體の幸福をのみのぞむことによつて、それらはそれらの固有の幸福をうるのである。

四七六 神のみを愛すること、自己のみを厭ふことが必要である。

もし足が、自分は身體に屬してゐるといふこと、一つの身體があつてそれに自分は依存してゐるといふことをすつと知らずにとするならば、さうして自分だけを知り自分だけを愛してゐるとするならば、自分がじつは一つの身體に屬してをりこれに依存してゐるといふことを知るにいたつたときは、どんなに残念におもふことであらう、どんなに恥づかしくおもふことであらう、自分のそれまでの生活を。また自分に生命をふきこんでくれてゐたところの身體に對して自分が無益のものであつたことを。もし身體が、ちやうど足が身體をはなれてゐたやうに、足をうちすて足をはなれたのであつたならば、足は死んでしまつてゐたところだつたのだ！ 足はどんなに身體のうちに保たれてゐたいとねがふことであらう！ どんなによく服従して、身體の支配者である意志に自分をまかせて治めてもらふことであらう！ 必要なばかりには切りすてられてもよいと承諾するにいたるまでに！ さもなければ足はその足としての特性を失ふ



ことにならう。おもふにあらゆるものを存在せしめてゐるただ一つのものであるところの身體のためには  
いかなる足もみづからを亡きものとするのをねがふべきである。<sup>(1)</sup>

(一) コリント前書(一)二ノ一二以下)にある體と手足とのたとへを参照。このたとへはすでにエピクテトス  
に見られる。

四七七 我々が人に愛されるにあたひするといふことはまちがひである。愛されたいとのぞむのは正しい  
ことでない。もし我々が理性的なものにまた公平なものに生れついでる我をも人もよく知つてゐるので  
あるとしたならば、我々はさやうな(人に愛されたいといふ)傾きを意志に與へはしないであらうが。し  
かし我々はじつはこの傾きをもつて生れついでる。従つて我々は正しく生れついでるない、なぜならす  
べてのことが自己に向ふからである。これはすべての秩序に反することである。一般者に向はなければな  
らない。自己に向ふといふ傾きは、戦争において政治において經濟において人間の個々の身體において、  
あらゆる無秩序のはじまりである。意志はさやうにしてそこなはれる。

もし自然的なるさうして市民的なる共同體の手足がその團體の幸福に向ふとするならば、その共同體そ  
のものは、それを手足としてもつ更に一般的なる他の一つの團體に向ふべきである。さやうにして人は一  
般者に向ふべきである。さうしてみると、我々は不正にさうして邪惡に生れついでる。

四七八 我々が神のことをおもはうとするとき我々の心を外らせ我々をいざなつてほかのことをおもはせ  
るものはないであらうか。さういふものはすべてよこしまなるものである。さうしてそれらは我々ととも  
に生れる。

四七九 もし神といふものがあるとすれば神のほか愛してはならない。はかない被造物を愛してはな  
らない。ちゑの書の中の不信仰者の推論は神がないといふことの上の論議をおいてゐる。<sup>(1)</sup>「さうで  
あるとして被造物をだから楽しもうではないか」といふのだ。これはじつによくない行きかたである。し  
かしもし愛すべき神があるとしたらさうは結論しなかつたであらう。反つてそれとは反對の結論をしたで  
あらう。「神といふものはある、だから被造物を楽しまないやうにしようではないか」これが賢者の結論  
である。

従つて我々をいざなつて被造物に執著せしめるところのものはすべて悪い、なぜならそれらは、もし我  
我が神を知つてゐるならば神につかへることをさまたげ神、を知らないならば神を尋ね求めることをさま  
たげるからである。

さて我々は邪欲に満ちてゐる。従つて我々は惡に満ちてゐる。ゆゑに我々自身を厭ふべきであり、また  
我々を唯一の神に對してでなくほかのものに對しての執著へといざなふすべての\*もの\*をいとふべきで  
ある。

(一) 舊約外典ソロモンのちゑ二ノ六に惡しき者のことばとして「されば、いざ、あるがままなるよきものを



楽しみ、造られしものを用ふるに、若者のごとくひたすらにせん」

四八〇 手足が幸福になるためには、それらが意志を持つことさうしてその意志を身體に適はしめることが必要である。

四八一 ラケダイモン<sup>(一)</sup>の人々やそのほかの人々の高潔な死の手本はほとんど我々を感動させない。だつてそれは一たい我々に何をもたらすであらうか。ところが殉教者の死の手本は我々を感動させる、なぜならこの人々は我々と同じやうに手足である<sup>(二)</sup>。我々はこの人々と共通のつなを持つてゐる。この人々の決心は我々の決心を成り立たしめることができる。ただに手本をしめすがゆゑのみならずその決心がおそらく我我をして決心せしめるに値ひするものであるがゆゑに。異教徒の手本にはさういふものがない。我々は彼らとはすこしもつながりを持たない。ちやうど、他人が金持になつても自分は金持にならない、けれども父か夫が金持になるならば自分も金持になるやうなものだ。

(一) ラケダイモンすなはちスパルタ (二) 「我らも多くあれどキリストに在りて一つ體にして各々がひに肢たるなり」ロマ書一二ノ五。

#### 道 徳

四八二 神は、みづからの存在の幸福を一向に感じないところの天と地とをつくりたまつたのち、みづか

らの存在の幸福をよく知るところのさうして考へる手足をもつて一つの身體を構成するところのもろもろの存在者をつくらうとのぞみたまうたのであつた。といふのは我々の手足はそれらの和合の幸福といふものをまたそれらのすばらしい叡知の幸福といふものを一向に感じないのである。また自然がそれらに生命をふきこみそれらを殖やしそれらを存続せしめようと心づかひをしてあてくれることの幸福といふものを一向に感じないのである。これらもろもろの存在者は、もしそれを感じるとしたら、それをさるとしたら、らどんなに幸福なことであらう！ がしかしそのためには、これらもろもろの存在者は、それを知るための知力を有することが必要であり、普遍的なる魂の意志を承知するためのよき意志を有することが必要であらう。もし知力をあたへてもらつても、榮養をほかの手足に渡さず自分のところにとどめておくことにその知力を用ひるとするならば、彼らはただに不正であるばかりでなく惨めでもある、さうして互ひに愛しあふよりはむしろ憎みあふであらう。彼らの至福もまた彼らの義務も、彼らの屬してゐるところのさうして彼らがお互に愛しあふよりはさらによく彼らを愛してくれるところの全體の魂の導きに同意することにあるのだから。

四八三 手足であるといふことは、ただ全體の精神によつてのみまた全體の利益のためにのみ生命をもち存在をもち動きをもつといふことである。

手足は、切離されてしまつてもう自分の屬するところの體を見ないならば、滅びゆき死にゆくべき存在でしかない。さうであるのに手足は自分をひとつの全體であるとおもひ、自分の依りたのむところの體が



すこしも見えないので、自分にのみ依りたのむものとおもひ、自分自身を中心とし體としようとのぞむ。しかし自分のうちに生命の本源を持たないものだから、自分が體でないことをよく知りながらしかも自分が體の手足にすぎないことをさとらず、自分の不確實な存在の仕方のうちにあて迷ふばかりであり不審におもふばかりである。つひに手足が自分を知るにいたるならばそのとき手足はあたかも自分の家へ歸つたやうなものであり、もう體のためにしか自分を愛しないやうになる。さうして自分の過去のまよひを悔いなく。

手足はその本性として、自分自身のためにしかまた自分の奴隷とするためにしか他を愛することはできないものである。なぜならすべてのものはいかなるものをよりも自分を愛するものであるから。しかし手足はもし體を愛するならばそれは自分自身を愛することとなる、なぜといふのに手足は體において、體によつて、さうして體のためにのみ存在するにほかならないのであるから。 \* *Qui adheret Deo unus spiritus est.* \*  
(1)

\*體は手を愛する。手は、もし意志を持つてゐるとするならば、魂が自分を愛してくれるのと同じやうにして自分を愛すべきであらう\*。 \*これを越える愛はいかなる愛も正しくない\*

\* *Adhaerens Deo unus spiritus est.* 人は自分を愛する、なぜなら人はイエス・キリストの手足であるがゆゑに。人はイエス・キリストを愛する、イエス・キリストは人を手足として持つところの體でありたまふがゆゑに。すべては一つである。一は他においてある。三つの位のやうに\*

(1)「主につく者はこれと一つ體となるなり」コリント前書六ノ一七。

四八四 全キリスト教國を治めるのにはいかなる律法よりもすぐれた二つの律法で十分である。

(一) その中なる一人の教法師イエスをこころみるためにとふ「師よ律法のうちいづれの誠命か大いなる」。イエスいひたまふ「汝心を盡し精神を盡し思ひを盡して主なる汝の神を愛すべし」これ大にして第一の誠命なり第二もまたこれにおなじ。「おのれの如く汝の隣を愛すべし」。すべての律法と預言者とはこの二つの誠命によるなり」マタイ二ノ三六、マルコ二ノ二八。

四八五 人間は邪欲のゆるぎにいとふべきものであるから、まことの唯一の徳は自己を厭ふことであり、またほんたうに愛すべき存在を、これを愛するために、尋ねもとめることである。しかし我々は我々の外にあるものを愛することはできないから我々のうちにあるところのさうして我々でないところの存在を愛しなければならぬ\*このことはすべての人間の各々について真理である。さて\*さやうな存在はふへん的な存在者のほかはない。神の國は我々のうちにある。ふへん的な善は我々のうちにあり、我々自身であり、しかも我々ではない。

四八六 人間の品位は、人間が罪をもたなかつたときは、被造物を使役しこれを支配することにあつた、しかし今は被造物からはなれこれに屈従することにある。  
(二)



(一) 神にむすばれるために離れるのであり、へりくだるために屈従するのである。

四八七 \*その信仰において\*神をあらゆるものの原理としてあがめずまたその道徳において唯一の神をあらゆるものゝ対象として愛しない宗教は、いかなる宗教も虚偽である。

四八八 ……しかし、もし神が最初でないならば神が最後であることは不可能である。ひとはその眼を高くむける、しかしその身は砂上に支へられてゐる。地は雷のごとく鳴りひびくであらう、さうしてひとは天をあふぎながらたふれるであらう。<sup>(一)</sup>

(一) この断章は 2<sup>e</sup> Manuscript Guerrier とよばれるものによる。

四八九 \*もし\*すべてのものの唯一の原理、すべてのものの唯一の目的がある\*とするならば\*、すべてのものはそれによつてありすべてのものはそれのためにある。従つてまことの宗教はそれ以外のものをあがめないことそれ以外のものを愛しないことを我々に教へてくれなければならない。しかし我々は我々の知らないものをあがめる能力をもたないし我々以外のものを愛する能力をもたないのであるから、右のやうなつとめを教へてくれる宗教はまたさやうな無能力をも教へてくれなければならない、さうしてそれを直す方法をも教へてくれなければならない。一人の人間のゆるぎにすべての人々は見棄てられ神と人間とのあひだのつながりは絶えたこと、また一人の人間によつてそのつながりはつくろはれたことをその宗教

は我々に教へる。<sup>(二)</sup>

我々は神の愛にきはめてそむいて生れてをりまたこの愛をきはめて必要とするのであるから、我々はどうしても罪を持つて生れついでるとしななければならない、さうでないならば神のはうが不正となりたふであらう。<sup>(三)</sup>

(一) 原罪および贖罪に関する聖アウグスチヌスの教説 (二) 人間は人間の根源であり目的であるところの神から本性に従ひ理性に従つて離れ去つたのであるからそこに何らかの罪がおこなはれたとしなければならない。神か人間かどちらかが罪を犯したとしなければならない。神であるとするならばそれはその聖き本質に反する、それゆゑ人間であるとするべきである。神を正しいとするために人間の原罪は必要である。

四九〇 人々は、価値をつくることに慣れてゐるがただ単にその価値の出来上つてゐるところにおいてその価値をうめあはせるといふことに慣れてゐるだけであるものだから、神を彼ら自身によつて判断する。<sup>(一)</sup>

(一) 人間は神の正義を判断して、各人の価値におうじて行爲を裁いてくださるものと考へてゐる。が神の正義は価値をつくりだすことつまり恩寵と救ひとをあたへることにある。それは我々の存在の後にでなく以前に働いてゐるものであり、個別的規準的なものでなく創造的構成的なものである。Du Guetのことは「我々が愛するばあひ我々はそこに善を豫想してゐる。神が愛するばあひ神は善を創造する」

四九一 まことの宗教は人をしてその神を愛せしめることをその特徴として持たなければならない。これはまことに正當である、それにもかかはらずどんな宗教もそれを命じなかつた。我々の宗教はそれを命じ



た。まことの宗教はなほ邪欲と無能力とを知ることのできたものでなければならぬ。我々の宗教はそれらを知ることができた。我々の宗教はそれらを直すかすの方法をさづけてくれたはずである。その一つは祈である。いかなる宗教においても、人は神に向つて、神を愛し神に従ふちからをあたへて下さいと乞ひ求めはしなかつた。

四九二 自己のうちなる自愛心を厭はず、また自己を神にしようといざなふところの本能を厭はぬ者は、まことに盲目である。これほど、正義に反し、眞理に反したものはないことを、誰がさとらないであらうか。だつて我々がさういふものに値するといふことはまちがひである。またさういふものに到達することは不正であり不可能である、なぜならすべての者が同じことをのぞむからである。従つてこれは我々の生れついでるところの明白なる不正であり、我々はそこから脱れ出ることができない、\*しかも我々はそこから脱れ出なければならぬ\*

しかるにいかなる宗教も、これが罪であること、これに我々は生れついてゐること、これを防がなければならぬことをしめしてくれたものはなく、またこれをいやす方法をしへようと考へてくれたものはない。

(一) 神或は神にひとしいもの (二) 神或は神にひとしいものになること (三) 自愛心。

四九三 まことの宗教は我々のつとめ、我々の無能力、\*高ぶりと邪欲\*、それらをいやす方法、\*へりくだり、節欲を\*をしへる。

四九四 まことの宗教は、偉大と悲慘とをしへてくれなければならない、また自己に對する尊敬と輕蔑とに、それから愛と嫌惡とにみちびいてくれなければならない。

四九五 もし自分が何ものであるかを追究することなくして生きることがとほうもない盲目であるとするならば、神を信じながらよこしまに生きることはおそるべき盲目である。

四九六 信仰と善心とのあひだのひじやうな相違を、經驗は我々に見せてくれる。

神の慈悲をよいことにして、よきわざをなすことなく無頓着のうちに生きる人々に

四九七 我々の罪の二つのみなもとは高慢と怠惰とであるから神はこれらのものをいやすために神のうちにある二つの性質を我々にしめしたまうた。すなはち慈悲 misericorde と正義とがそれである。正義の特性はどんなにきよいわざをおこなふ者であらうともその高慢を打ちくじくことにある et non intres in iudicium. (一) また慈悲の特性は、「神の慈悲汝を悔改めにみちびく」(二)の章句に従ひまたニネベの人々の「神あるひは我らにあはれみを下したまふやも知れざるゆゑに悔改めん」(三)の章句に従つて、よきわざを人



にすすめつつ意惰とたたかふことにある。されば慈悲は怠慢をゆるすどころではなく反つてこれと明らかにたたかふことをその特性とする。従つて「もし神に慈悲がないとするならば徳を求めてあらゆる種類の努力をしなければならぬ」といふのでなく、反つて神に慈悲があるからこそあらゆる種類の努力をしなければならぬ\*といはなければならぬ。

(一) 「汝のしもべの審判にかかづらひたまふなかれ」生ける者一人として神の前に義しとせられる者はあな  
い詩篇一四三ノ二 (二) ロマ書二ノ四 (三) ヨナ書三ノ九。

四九八 信仰に\*はひるにあたり\*苦痛のあることはほんたうである。しかしこの苦痛は我々のうちに芽ばえはじめると信仰からでなく我々のうちにまだ残つてゐる不信仰からくるものである。もし我々の感性が悔改めにさからはず我々の墮落が神の純潔にさからはないならばつらいことはそこには何もないはずである。我々にとり本來的なものであるところの缺陷が超自然的なる恩寵に反抗するのにおうじてのみ我々は苦しむのである。我々の心はこれらの相反する努力のあひだに引き裂かれるおもひがする。しかしこのあららしさは我々をひきとめるところのこの世のゆるぎではなく我々をひきよせるところの神のせるであるといふならば、それはまことに正しくない。\*それは\*例へば盗賊の腕から母に奪ひかへされる子供が、苦痛を受けながらも、自分の自由を取り戻してくれる愛に満ちた正當なる暴力を愛し、自分を不正にひきとめる人々の有無をいさぬ壓制的暴力をいとふことを當然とするやうなものである。神がこの世の人々に向つてなされることのできる最もひどいたたかひは、神がこの世にもたらすために來りたまうたところの

たたかひ、すなはち「われたたかひをもたらさんとて來れり」といひこのたたかひについて教へるためには「われ劍と火とをもたらさんとて來れり」といはれたあたたかひなしに、人々を放つておかれることにある。神の來りたまふまでは世界はこのいつはりの平和のうちに暮してゐたのである。

(一) マタイ一〇ノ三四 (二) ルカ二ノ四九 (三) 一六五六年九月二四日ルアンネス嬢宛ての手紙に「だから一生この戦ひに堪へゆかうと決心しなければなりません、この世に平和はないのですから。イエスは平和をでなく劍をもたらすために來りたまうたのです」

#### 表面上のわざ

四九九 神にも人々にもよろこばれるといふものほど危険なものはない。なぜなら神にも人々にもよろこばれる状態は神によるこばれる一つのものとなんによるこばれる別の一つのものを持つてゐる。聖女テレーズの偉大さにおいて神によるこばれるものは啓示をうけるこの聖女の深い謙虚であり人々によるこばれるものは、この聖女のちゑである。そこでひとは彼女の状態を手本としてこれを真似るつもりであるながら、従つて神の愛するものを愛し神の愛する状態に自分をおくつもりであるながら、じつは彼女のことばを真似るのにうき身をやつすのである。

斷食してみづから足れりとするよりは斷食せずしてこれに謙虚であるほうがましである。パリサイ人、  
取税人。



心にとどめて忘れずにあるといふことは、もしそのことが私に役立ちもするが私をそこなひもするのであるならば、また何事も神の祝福によつておこなはれるのであり、神はその祝福を神のためになされたこととがらに對してのみあたへたまふのであり、それも神の掟に従ひ神の方法に従つてあたへたまふのであるならば、私にとつて何の役に立たうか、なぜといふのに神は悪から善を引きだすことができたまふのである。人は神なくしては善から悪を引きだすのであるのを見れば、身の持ち方といふものは、ことさらに劣らず大切なものであり、おそろくはことさらに以上に大切なものであるから。

(一) ルカ一八ノ九以下にパリサイ人と取税人についてのすばらしいたとへ話がある。——二人の者祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人一人は取税人なり。パリサイ人立ちて心の中にかく祈る「神よ我はほかの人の、奪ひ、不義、姦淫するがとき者ならず、又この取税人のごとくならぬを感謝す。われ一週のうちに二度断食し、すべて得るもの十分の一をささぐ」。しかるに取税人は遙かに立ちて目を天にむくことだにせず胸をうちていふ「神よ罪人なるわれをあはれみたまへ」。われ汝らに告ぐ、この人はかの人よりも義とせられておのが家に下りゆけり。

五〇〇 善といひ悪といふこれらのことばの理解。

五〇一 第一の段階は悪いことをしてとがめられよいことをしてほめられる。第二の段階はとがめられもせずほめられもしない。

五〇二 アブラハムは自分のためには何も取らなかつた、ただその召使ひたちのために取つただけである。<sup>(一)</sup>それと同じやうに義人は自分のためには世から何ものも取らない、世の賞讃をも受取らない、ただ彼があたかも主人であるかのやうにして「行け」「來たれ」とこゑをかけて使役するところのもろもろの意欲のために取るだけである。——*Sub te erit appetitus tuus.*<sup>(二)</sup> 意欲はそんなぐあひに支配せられるとき徳となる。どんよく、ねたみ、いかり、これらのものは神さへもその身の屬性としてゐたまふのである。さうしてこれらのものは寛容、あはれみ、誠實と同じく徳であり、これらのものはまた意欲でもある。これらのものを奴隷のやうに使役しなければならぬ、さうしてこれらのものには糧をあたへても、魂にはあたへぬやうにしなければならぬ。なぜなら意欲が支配者となるならば徳も悪徳となつてしまふ、さうしてそのときこの支配者はその糧を魂にあたへ、魂はこれに養はれ、これに毒せられる。

(一) 創世記一四ノ二四 (二) 創世記四ノ七エホパカインにいひたまふ「汝は汝の意欲を支配せん」

五〇三 哲學者たちは不徳を神に屬するものとするによつてきよらかなものとした。<sup>(一)</sup>キリスト教徒は徳をきよらかなものとした。

(一) モンテーニュ二ノ一二によれば「古代人たちは信仰や徳や名譽や和合や自由や敬神にのみならず逸樂や欺瞞や死や美望や老いや不幸や恐れや熱病にも神性を賦與した」



五〇四 義人はどんな小さなことからでも信仰によつておこなふ。すなはち義人はその召使ひたちを叱るとき、神の御心によつて召使ひたちの改心をねがふ、さうしてこの人々を矯め直してくださいと神にいのる、さうして彼の叱責から期待すると同じやうに神から期待する、さうして彼のおこなふ矯正を祝福してくださいと神にいのる。他のおこなひにおいてもさうである。

五〇五 あらゆるものは我々の命をうばふことができる。我々に役立つやうに作られたものでさへも。たとへば自然において墻壁が我々を殺すことができるやうに、また正しく歩かないならば階段が我々を殺すことができるやうに。

どんなに小さな運動も自然のすべてにえいきやうする。一つの石のために海のすべてが變はる。そのやうに恩寵においてどんなに小さなおこなひもその結果で全體にえいきやうをあたへる。従つてすべてのものは大切である。

それぞれのおこなひにおいては、そのおこなひを見る以外に、我々の現在・過去・未來の状態、およびこの状態からえいきやうをうける他の人々の状態を見ること、それらすべてのもののあひだの關係を見ることが必要である。そのとき人は大いに慎しむであらう。

五〇六 どうか神よ、我々の罪をすなはち我々の罪の結果をそれがいかなるものであらうとも我々のせらにして咎めないでください、もし我々があなたの慈悲を失つてあやまちに従はうものなら、いかにそれが小さなあやまちであらうともそれはおそるべき結果になるのですから。

五〇七 恩寵のはたらき。心のぶさ。外面的事情。

五〇八 人間を聖者にするためにはまことに恩寵は必要である。これを疑ふ人は聖者とはどういふものであるか人間とはどういふものであるかを知らない人である。

#### 哲學者

五〇九 自己を\*知らない\*人間に向つて君は自分自身で神のはうへ歩いてゆくのだから、心をかけてやるのはむだなことである！ 自己を知れる人間に向つてそのやうなことをあたへてやるのもむだなことである！

(一) なぜなら自己をよく知れる人間は自己の本性のちからのみをもつてしては神に到達することのできぬことをよく知つてゐるからである。

五一〇 人間は神にふさはしくない、しかし、神にふさはしい者になるといふことはできないことではない。しかし神に

神にとつて、その身をみじめなる人間に結びつけるといふことはふさはしいことではない、しかし神に



とつて、人間を人間のみじめさから救ひだすといふことはふさはしくないことではない。

五一 神とまじはるのに値ひするためには人間といふものはあまりにも小さい、さういひたいといふなら、さういふ判断をするところの人間とはまことに大いなるものであるとしなければならぬ。

五二 \* こんないひまはしをするなら、それはすべてイエス・キリストの體にはちがひない、がしかしイエス・キリストのすべての體であるといふことはできない\*。\*二つのものが\*結合しても變化をしないのならば一が他になるといふことはできない。ちやうど變化をしないで魂が體に結合し火が薪に結合するばあひのやうに。しかし一つの形が他の形になるといふことができるためには變化が必要である、ちやうどことばが人間と結合するばあひのやうに。

私の體は私の魂をもたないならば人間の體をなさないのであるから、さうしてみると私の魂は、どんな物質でもよい或る物質に結合するならば、私の體をなすことにならう。これは必要なる條件と十分なる條件とを區別しないものである。結合は必要である、がしかし十分ではない。\*左の腕は右の腕ではない\*

不可入性は體のひとつの特性である。

同じ時に關する數における一致といふことは物質における一致といふことを要求する。それゆゑにもし神が私の魂を中國にある一つの體に結合せしめたまふとするなら、數においてひとしいところの同じ體は

中國にあることになるであらう。

そこを流れる同じ川は中國を同じ時に流れる川と數においてひとしい。

五三 なぜ神は祈をまうけられたか。

一、その創造物に因果性の尊嚴をつたへるために。

二、徳を誰から我々はうけるのであるかを、我々にをしへるために。

\*三、我々を努力によつて他のものもろの徳に値ひするものとするために\*

\*しかし神はみづからの優先<sup>T</sup> *priorie*を保つためにみづからの氣に入る者に祈をあたへたまふ\*

反駁。しかし我々は我々自身で祈を保有してゐるとおもふ。

それはおろかである。\*なぜなら\*信仰を持つても徳を持つことはできないのであるからには、どうして信仰を持つことになるのであらうか。不信仰から信仰へのへだたりが、信仰から徳へのへだたりより大きいであらうか。

「値ひした」<sup>T</sup>のことはあひまいである。(1)

*Meruit habere Redemptorem.* (2)

*Meruit tam sacra membra tangere.* (3)

*Digno tam sacra membra tangere.* (4)



Non sum dignus. <sup>(五)</sup>

Qui manducat indignus. <sup>(六)</sup>

Dignus est accipere. <sup>(七)</sup>

Dignare me. <sup>(八)</sup>

神はその約束にのみ義務を負ひたまふ。神は祈に正義をあたへることを約束したまうた。<sup>(九)</sup> 神は約束の子らに向つてのほかは決して祈を約束したまはなかつた。<sup>(一〇)</sup>

ちからは義人からとりのぞかるべきものであると聖アウグスティヌスはあきらかに語つた。しかしそれは偶然にさう語られたのである。といふのはそれを語る機会がなかつたといふことがありえたかも知れないからである。もつとも彼の主義から見ても、語る機会があつたら彼は必ずさう語つたにちがひないし、また反対のことがらを語るはずもありえない。とすれば、\*機会があつたらから\*さう語つたといふよりはむしろ機会があつたへられるならさう語らざるをえないのだ、後者は必然であり前者は偶然であるわけになる。だつてこの二つのばあひしか考へられない。

「おそれおののきておのが救ひを全うせよ」<sup>(一一)</sup>

- (一) 人間は贖主<sup>あがなひぬし</sup>をあたへられるのに値ひしたといふときこれはひとへにイエス・キリストの価値であるのに人間はこの価値を自分のものとおもふかも知れない。そこでどちらのがはの価値であるか意味があいまいになる
- (二) 贖主<sup>あがなひぬし</sup>に値ひした
- (三) かくもきよき手足にふれるに値ひした
- (四) 聖歌『王の旗』
- (五) ルカ七

六「百卒長、數人の友をつかはしていはしむ主よ、……我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり」

- (六) コリント前書一ノ二九「御體<sup>みからだ</sup>をわきまへずして飲食<sup>のみくひ</sup>する者はその飲食<sup>のみくひ</sup>によりてみづから審判<sup>さはん</sup>をまねくべし
- (七) 黙示録四ノ一一「我らの主なる神よ榮光と尊崇と能力とをうけたまふは宜<sup>よろ</sup>なり」
- (八) 聖母マリヤの祈禱「我をふさはしきものとせたまへ」
- (九) マタイ七ノ七「求めよさらば與へられん」
- (一〇) ロマ書九ノ八―九「すなはち肉の子らは神の子らにあらず、ただ約束の子らのみその裔<sup>うゑ</sup>と認めらるるなり。約束の御言<sup>みことば</sup>はこれなり、曰く『時再びめぐり來らば我きたりてサラに男子あらん』と」
- (一一) ペリピ二ノ一二を參照。

\* 恩寵<sup>T</sup>のしるし\*

五一四 Petenti dabitur. <sup>(一)</sup>「それゆゑに求めることは我々のちからのうちにある」さういはれようか？

——さうはいはれない、その反対だ、すなはち「それゆゑに求めることは我々のちからのうちにない」といはなければならぬ、なぜなら受けることは我々のちからのうちにあるが祈は我々のちからのうちにないのであるから。なぜといつて救ひは我々のちからのうちにないのであり受けることは我々のちからのうちにあるといふのであつてみれば、祈は我々のちからのうちにないこととなる。<sup>(二)</sup>

義人は従つてもう神にすがるべきではないであらう、なぜなら彼は願ふべきではなく反つて彼の求めるものを受けようと努むべきである。

そこで我々は結論しよう、人間は今はこの身近かなるちからを用ひる能力をもたぬのであるからには、



また、人間が神から遠ざからぬのはそのゆゑであることを神はのぞみたまはぬのであるからには、人間が神から遠ざからぬのは一つの有効なるちからによつてであるにほかならぬと。

従つて神から遠ざかる人々は、遠ざかるのに人の必すもつところのちからを持たないのであり、遠ざからない人々はこの有効なるちからを持つてゐるのである。

従つてこの有効なるちからによつてしばらくのあひだ辛抱つよく祈りつづけたのち祈をやめる人々は、この有効なるちからを持たない。

だからその意味で神のはうから先きに去りたまふ。

(一) 求むる者にはあたへられん。マタイ七ノ七には *Petite et dabitur* 求めよさらばあたへられんとある

(二) 神は求める者にはあたへることを約束したまふ、この意味において求めることは我々のちからのうちにある。しかし求めるのは救ひを求めたのでありこの救ひをあたへるかあたへないかは神の御心のうちにしかないのであるから、この意味においては祈り求めることは我々のちからのうちにはないといはなければならぬ。すなはち救をうることはこれを祈り求めることとこれを受けることとの二つにおいてなりたつと考へるとき、(神はあたへると約束したまふがゆゑに) 受けることは我々のちからのうちにあるとすれば、祈り求めることの方は我々のちからのうちにはないといはなければならぬ。祈にはすでに神の恩寵が豫想せられてゐるのである。この斷章はすべてその判讀をI版に従ふ。

五一五 選ばれたる者らは彼らの徳を知らず、<sup>(一)</sup>すてられたる者らは彼らの罪のふかさを知らまい。<sup>(二)</sup>主よ、いつ汝の飢ゑしを見て……渴ししを見て……

(一) 人の子は來りて審きの座につきすべての國人をその前に集め、羊飼ひの羊と山羊とを分けるごとく人々を右と左に分け右にをる人々にいふであらう、汝らは天國を嗣ぐがよい、汝らはわが飢ゑしときに食はせ渴ししときに飲ませ……てくれたと。ここにこの正しき者ら答へていふ「主よいつ汝の飢ゑしを見て食はせ渴ししを見て飲ませし。人の子答へて「まことに汝らにつぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは即ちわれになしたるなり。また左にをる者共にいふ、汝らは永遠の火に入るがよい、汝らはわが飢ゑしとき食はせ渴ししとき飲ませず旅人なりしとき宿らせず病みまた獄にありしとき訪れてくれなかつたと。ここにこの者共も答へていふ「主よいつ汝の飢ゑし或は渴し或は旅人或は裸或は病み或は獄にありしを見て事へざりし。ここに人の子答へていふであらう「まことに汝らにつぐ、これらのいと小さき者の一人になざりしは即ちわれになざりしなり」と。「かくてこれらの者は去りて永遠の刑罰に入り正しき者は永遠の生命に入らん」と聖書(マタイ二五ノ三一以下)はしるしてゐる。

五一六 ロマ書三ノ二七「誇るところは除かれたり。何の律法によりてか。行爲の律法か、しからず、信仰の律法によりてなり」——従つて信仰は、信仰の行爲のごとく我々のちからのうちにはない。信仰は別の仕方で我々にあたへられる。

五一七 ながさめを得るがよい。汝は汝から恩寵を待ち望んではならない、反つて、汝からは何をもち望まないといふことによつて恩寵を待ち望まなければならぬ。



五一八 聖書に従へば、いかなる身分の者も、殉教者たちさへも、おそれおののかなければならない。  
煉獄の最大の苦しみは審判の不確實といふことである。 Deus absconditus. (1)

(1) 「隠れてゐます神」断章「九四、二四二、五八五を参照。

五一九 ヨハネ傳第八章 Multi crediderunt in eum. Dicebat ergo Jesus: Si manseritis……, vere  
mei discipuli eritis, et veritas liberabit vos. Responderunt: Semen Abrahae sumus, et nemini  
servimus unquam. (1)

弟子とまことの弟子とのあひだには大きな相違がある。眞理が彼らに自由を得させるであらう、さう彼らに向つていつてみれば分る、なぜならもし彼らがこれに答へて彼らは自由であること、彼らのうちに悪魔への隷屬を脱れる力があること(2)をのべるならば、彼らはまさしく弟子ではあるが、しかしまことの弟子ではない。

(1) 「多くの人々イエスを信じた。ここにイエス言ひたまふ『もし汝らつねに(わが言葉に)をらばまことにわが弟子なり。而して眞理は汝らに自由を得させし』彼ら答ふ『我らはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷となりしことなし』ヨハネ八ノ三一 (2) 「まことに汝らにつく、すべて罪をかす者は罪の奴隷なり」(同八ノ三四) 「このゆゑに子もし自由を得させば汝ら實に自由とならん」(三六)

五二〇 律法は本性をうちこはすことなく反つてこれをうちたてた。(2) 恩寵は律法をうちこはすことなく反つてこれをはたかせた。(2) 洗禮において受けいれたる律法はキリスト教徒および回心者の生涯をつうする原動力である。

(1) ロマ七ノ七 (2) 同三ノ三一。

五二一 恩寵はつねにこの世に在るであらう——さうして自然性もまた——、従つて恩寵はなにか自然的なるものである。そこでつねにペラギウス派がをりつねにカトリックがをりさうしてつねに戦ひがあるであらう、なぜなら第一の誕生は一をつくり、第二の誕生の恩寵は他をつくる。

五二二 律法はそのあたへなかつたものを命じた。恩寵はその命するものをあたへてくれる。

五二三 すべての信仰はイエス・キリストとアダムとにおいて成り立つ。すべての道徳は邪欲と恩寵とにおいて成り立つ。

五二四 人間は絶望するか高ぶるかこの二つの危険にたえずさらされてゐるがゆゑに恩寵を受けることもできるし失ふことにもなるといふことを教へてくれる教説ほど、人間にとつてふさはしい教説はない。



五二五 哲學者たちのすすめてくれる自覚は人間の二つの在り方になつてゐない。

彼らは人間をただ偉大なものとばかり考へるやう説いてくれる、ところがさういふ在り方を人間はしてゐない。

彼らは人間をただ卑小なものとかばかり考へるやう説いてくれる、ところがさういふ在り方を人間はしてゐない。

\* 本性から出る \* 卑小感ではなくて悔改<sup>くわいあらた</sup>めによる卑小感が、 \* 偉大さのうちにじつとしてゐるためになくて \* 偉大さのほうに進んでゆくために、必要である。價值〔人間的なる〕の偉大さを自覚する心がではなくて恩寵の偉大さを自覚する心が、しかも卑小性といふものをくぐりぬけて後に、必要である。

五二六 みじめさを見れば絶望が納得でき高慢を見れば自負心が納得できる。キリストの託身はいかに大いなる救ひをほどこす必要があつたかといふことによつて、いかに人間がみじめであつたかといふことを人間に明示してくれる。

五二七 人間のみじめさを知ることなくして神を知ること高慢を生む。神を知ることなくして人間のみじめさを知るとは絶望を生む。イエス・キリストを知るとは中間を得る。なぜなら我々はそこに神をも我々のみじめさをも見出すから。

五二八 イエス・キリストは、一人の神であり、我々は高慢になることなくこの神に近づき、絶望におちいることなくその御足<sup>みあし</sup>のもとに身をかがめる。

五二九 ……善を得る能力を我々に持たしてくれない墮落<sup>B<sup>T</sup></sup>ではない、また、悪に染むおそれのない清淨でもない。<sup>(1)</sup>

(1) この文章は冒頭を「キリスト教において見られるものは」と補ふことができよう。じつさい寫本ではニ  
コルらしい筆蹟でさういふ意味に補はれてゐる。

五三〇 或る日私に或る人は語つて、懺悔をすませたとき自分は大きくうれしかつたまた心の安らかさをおほへたといつた。また或る人は語つて、自分はおそれをのきのうちから出られなかつたといつた。私はそこで考へた、この二人の者を一しよにしたら一人のよい者が出来さうだ、このおのおのは他の者の感情を持たないといふところに缺陷があると。これと同じことはほかのことからについてもよく起る。

五三一 主人の意を知つてゐる者は、一そうよけいにむちうたれるであらう、なぜならその者は主人を知る力をもつてゐる。<sup>(1)</sup> Qui justus est, justificetur adhuc. <sup>(1)</sup>なぜならその者は正義をおこなふ力をもつてゐる。最も多く受けた者は最も多く請求せられる、なぜならその者は助ける力をもつてゐる。

(1) ルカ二ノ四七「主人の意を知りながら用意せず、又その意に従はぬしもべはむちうたるること多から



ん、されど知らずして打たるべきことをなす者は、むちうたるること少なからん」(二)黙示録二二ノ一二「義なる者はいよいよ義をおこなふべし」

五三二 聖書はあらゆる状態を慰めるための、またあらゆる状態をおびえさせるための章句を用意した。自然は、自然界および道徳界における二つの無限によつて、これと同じことをしたやうにおもはれる。なぜなら我々は、我々の慢心を引下げるため、また我々の卑小感を高めるために、上のものと下のもの、より多い能力のものより少い能力のもの、高いものとみじめなるもの、これらをつねに持つであらうからである。

五三三 *Comminentes cor.*<sup>T</sup> 聖パウロ。これがキリスト教的性格である。「\*アルベは君を指名した\* 君はもう他人だ」。コルネイユ。マコに非人間的性格がある。人間的性格はこれと反対である。

(一) 聖パウロにはこのままのことばは見當らないが「けんそん」(ピリピ書二ノ三)「心を卑きにつける」(ロマ書二ノ一六)などのことは度々説かれてある (二) 悲劇「オラース」Horace 二ノ三。紛争解決のためロマはオラース家を選びアルベの市はキュリアス家を指名した、兩家はすでに姻戚關係にあつたがここに互ひに敵となりそれぞれの市の名譽をかけて決闘しなければならぬ、オラースはキュリアスにいふ、ロマは私をアルベは君を指名した、もう私は君と何の縁もない。

五三四 二種類の人々だけがある。一はみづからを罪人と信じてゐる義人。他はみづからを義しいと信じてゐる罪人。

五三五 我々は缺點を忠告してくれる人々に大そうおかけをかうむつてゐる。なぜならこの人々は我々を苦しめ鍛えてくれる。この人々は我々がけいべつされてゐたことををしへてくれる、が將來はけいべつされないやうにしてくれるかといふとそれはさうではない、なぜなら我々はけいべつされるに足る缺點をほかにもたくさん持つてゐるのであるから。彼らは、矯正の實行、缺點の除去への心がまへをさせてくれるわけである。

五三六 人間といふものは自分がおろかであることを人からしきりにいはれるとついさう信じてしまふやうにできてゐる。自己に向つてしきりにさういひきかせてゐると自己をしてさう信じさせてしまふ、なぜといふのに人間のみが内的會話をおこなふからである、これをただしく規制することは大切である。即ち *Corruptunt mores bonos colloquia prava.*<sup>(1)</sup> 我々はできるだけ沈黙のうちを神とのみ語りあふことが必要である。神が眞理であることを我々は知つてゐる。さやうにして我々は眞理を自己に納得せしめる。

(一) 「悪き交際は善き品性 *mœurs* をそこなふ」コリント前書一五ノ三三。

五三七 キリスト教はちがふ。キリスト教は人間に命じて、自己を卑しきものと認めよ、いとふべきもの



でさへあると認めよといひ、しかもまた神のごとくなりたいたのぞめといふ。右のやうな平衡をとつてくれる錘おもりを持たないとしたら、この持ち上げは人間をおそろしく傲慢な者にするであらうし、このおとしめは人間をはなはだしく下卑くだびた者にしてしまふにちがひない。

五三八 キリスト教徒は、自分が神とむすばれてゐることを信じて何と高慢の心をいだかぬことであらう！ また自分を蚯蚓みみずにひきくらべても何と自己嫌惡の心を持たぬことであらう！

生命と死、善と惡、これらをうけいれるすばらしい行き方！

五三九 服従といふ點で兵士と修道士シヤクトイとのあひだにどんな相違があらうか。なぜなら兵士も修道士もいづれも服従し依存し、鍛錬においていづれも苦しむ。しかし兵士はつねに頭かしらとならうとのぞみ頭かしらとなることがない、なぜといつて隊長も君主さへもつねに奴隸であり依存的であるのだから。さうであるのに兵士はつねにそれをねがひつねにそれに到らうとつとめる。しかし修道士のはうはただ從屬することのみを誓ふばかりである。かくてこの人々は\*どちらのがはもつねに\*不斷の隸屬をとることにおいて相違がない、がしかし修道士はつねに希望のうちをり兵士は絶えて希望のうちにないといふ點で相違がある。

五四〇 キリスト教徒のいづく無限の福を得たいといふ希望には\*おそれもまじつてゐるが現實の\*歡喜がまじつてゐる。なぜならそれは、王國を得たいと望むが臣下であるがゆゑに一向に得られないといふやうなさういふものとはちがふからである。キリスト教徒は聖きものをのぞみ、また不正からのまぬがれをのぞむ、さうしてその幾らかをすでに得てゐるのである。

五四一 誰もまことのキリスト教徒のごとくには幸福でもなく合理的でもなく有徳でもなく愛すべき者でもない。

五四二 人間をまつたく同時に愛すべき者幸福なる者とするものは、キリスト教のほかにはない。道義 honnêteté<sup>(1)</sup> によつては人間は同時に愛すべき者幸福なる者となることはできない。

(一) これは交際社會に快適なものを求めようとする世俗的道義 honnêteté mondaine の意であらう。

序

五四三 神に關する形而上學的證明は人々の推論からはなはだ遠いものでありまたはなはだこみいつたものであるからほとんど人を感動させない。\*或る人々には\*役立つとしても、それはこの證明を眼前にしてゐるほんの一瞬間だけのことであり、一時間もするとだまされたのではなからうかと氣づかふやうになる。

Quod curiositate cognoverunt superbia amiserunt.<sup>(1)</sup>

それはイエス・キリストなくして得られる神の認識より生ずるものであり、媒介者なくして知つた神と



\*媒介者なくして\*まじはらうとするものである。

媒介者によつて神を知つた人々は自己のみじめさをよく心得てゐる。

(一)「彼らは好奇によつて知り得たものを高慢のゆゑに失つた」聖アウグスティヌス・説教一四一。

五四四 キリスト教の神は魂に向つて、魂の唯一の善は神であること、魂の憩ひはすべて神にあり、魂は神を愛することにのみ喜びを持たなければならぬこと、さういふことを感じさせる神である。また同時に、もろもろの障碍が魂をひきとめあらゆる力をもつて神を愛させまいとするのを嫌惡せしめる神である。魂を拘束する自愛心と邪欲とは神にとつてゆるしがたいものである。魂は魂を墮落させてしまふ自愛心の根源をもつてゐること、神のみがこれを醫すことができることを、この神は魂に感じさせる。

五四五 イエス・キリストはただつぎのことを教へたまうたのにほかならない、すなはち\*人々は自己自身を愛するものであること\*、人々は奴隷であり盲目であり病者であり不幸であり罪人であること、イエスはこの人々を救ひ、あかるみにおき、祝福し、いやしたまふべきこと、それらのことがらは、自己自身を厭ふことによつて、また悲惨と十字架の死をとほしてイエスにしたがふことによつて成就すること。

五四六 イエス・キリストを知らずしては人間は不徳と悲惨とのうちにゐなければならぬ。イエス・キリストとともにあるとき人間は不徳と悲惨とをまぬがれる。我々のあらゆる徳あらゆる至福は彼においてある。彼をよそにしてはただ不徳、悲惨、誤謬、暗黒、死、絶望のみがある。

イエス・キリストによる神

五四七 我々はイエス・キリストによつてのほか神を知ることができない。この媒介者なくしては神とのいかなるまじはりもない。イエス・キリストによつて我々は神を知る。イエス・キリストなくして神を知り神を證するとのべた人々はすべて力なきあかしをしかなしえなかつた。しかしイエス・キリストを證するためには我々ほもろもろの預言を持つてゐる、これらの預言は確實にして明瞭なるあかしである。これらの預言は、成就せられたるものでありまた出來事によつて眞なることの立證せられたるものであつて、これらの眞理の確實であることを示してゐる従つてまたイエス・キリストの神であることを證明してゐる。それゆゑイエス・キリストにおいてまたイエス・キリストによつて我々は神を知るのである。これをよそにして、聖書がなく、原罪がなく、また約束せられて來りたまうた必要なるこの媒介者がなければ、我は絶対に神を證明することはできない、また良き教理を説くことも良き道徳を説くこともできない。しかしイエス・キリストによつてさうしてイエス・キリストにおいて我々は神を證明する、また道徳と教理とを\*説く\*。イエス・キリストはそれゆゑに人々のまことの神である。

\*しかし我々は同時に我々のみじめさを覺る、なぜならこの神は我々のみじめさの贖主であるにほかならないのである。されば我々は我々の不正を知ることによつてのみ神をよく知ることができ。従つて自己のみじめさを知ることなくして神を知つた人々は、神に榮光をあたへたのでなく反つて彼ら自身に榮光を



あたつたのである\*。 \* Quia non cognovit per sapientiam, placuit Deo per stultitiam praedicatōnis salvos facere.\*<sup>(1)</sup>

318

- (一) これらの眞理——すなはちモーセ(創世三ノ一五)に教へられイザヤ(五三章等)に説かれた原罪と贖罪  
(二) 「世は己れの智慧をもて神を知らず、このゆゑに神は宣教の愚をもて、信する者を救ふをよしとしま  
へり」コリント前書一ノ二一。

五四八 我々はイエス・キリストによつてのみ神を知る\*のみならず\*またイエス・キリストによつてのみ我々自身を知る。我々はイエス・キリストによつてのみ生を知り死を知る。イエス・キリストをよそにしては生が何であるか死が何であるか神が何であるかまた我々自身が何であるかを、我々は知ることがない。

従つてイエス・キリストをのみ対象としてゐる聖書がないならば我々は何も知ることがない、さうして神の本性のうちにまた自己の本性のうちに暗黒とこんらんをしか見ることがない。

五四九 イエス・キリストなくして神を知ることが不可能であるのみならず無用である。\* 彼らは遠ざからなかつた、反つて近づいた。<sup>(二)</sup> 彼らは身をおとしめなかつた、反つて……\*

Quo quisque optimus, eo pessimus, si hoc ipsum, quod sit optimus, ascribat sibi.<sup>(三)</sup>

- (一) 彼ら——媒介者をとほして神を知らうとつとめた人々は (二) 反つて「高められた」とおぎなふこと

は容易であらう (三) 「我々をよくしてくれるものも、我々をわるくしてしまふ、もし我々がそれを我々自身のせぬにするならば」(聖ヤルナルドス・説教集)

五五〇 私は貧しさを愛する、なぜならイエスもまたそれを愛された。私は富を愛する、なぜなら富はみじめな人々を助ける方法をあたへてくれる。私はすべての人に忠實を守る、また悪をなす人々に悪を報い「ない」。むしろ私は、人々のがはから善をも悪をも受けない私の状態と同じ状態に、彼らもなつてほしいと願ふ。私はすべての人に對して正しく眞實にまじめに忠實でありたいとつとめる。神によつて私といよいよ近く結びつけられた人々に對して、私は愛情を抱く。さうしてただ一人であるときでも人々の眼前にあるときでも、私は私のいかなる行動をするにも、神に見守られる。神は私のすべての行動をさばきたまふにちがひない。私は私のすべての行動を神にささげる。

これが私の氣持である。私は私の生涯のすべての日々に私の贖主<sup>あがたひぬし</sup>をほめたたへる。私の贖主はこれらの日々を私にあたへたまうた、さうして缺陷と悲惨と邪欲と高慢と野心とに満ちた一人の人間から、私のうちにあるものとはただ悲惨と誤謬とにすぎないのであつてみれば當然あらゆる榮光の源とせらるべきその恩寵のちからをもつて、それら一切の悪をまぬがれたる人間をつくりたまうた。

五五一 Dignior plagis quam osculis, non timeo, quia amo.<sup>(1)</sup>

- (一) 「接吻せられるよりも咎うたるに」さう値ひしてあても私はおそれない、なぜなら私は愛してゐる」

319



このことはおそろく聖ペルナルドスを回想してゐる。なほ *digna plagis* といふ表現はルカ二ノ四七に見える。

イエス・キリストの墓

五五二 イエス・キリストは\*死にたまうた、けれども\*十字架の上にあつて人々に見られたまふ。イエス・キリストは\*死んで\*墓の中にかくされたまふ。

イエス・キリストは聖徒たちによつてのみ葬られたまふ。

イエス・キリストは墓にあつて何の奇蹟をもなさらなかつた。

聖徒たちのみ中にはひる。

イエス・キリストが新しい生命を取りたまふのはそこにおいてであつて十字架の上においてではない。

それは受難の\*それから贖罪の\*最後の神祕である。「イエス・キリストは生きて死にて葬られてよみがへりて教へたまふ」

イエス・キリストは地上においては墓よりほかに憩ふところを持ちたまはなかつた。

敵は墓にいたるまで彼を迫めてやまなかつた。

\*イエスの\*秘義(一六五五?)

五五三 イエスはその受難において、人々のあたへる苦惱をたへしのびたまふ、がしかし臨終においては

みづからがみづからにあたへる苦惱をたへしのびたまふ。 *turbare semetipsum* (二) これは人間の手による苦痛ではなく全能者の手による苦痛である、さうしてこれをこらへうるためには、全能でなければならぬ。

イエスはなにかの慰めをすくなくとも三人の最も親しい友に求めたまふ、しかし彼らは眠つてゐる。

イエスは、自分と一しよにゐてもう少したへしのぶやうにと彼らにねがひたまふ、しかし彼らは、ただの一瞬さへも眠りをさまたげられないほど、同情を少しも寄せず、まつたきおこたりのうちにイエスをうちすてておく。かくしてイエスは見はなされ、ただひとり神の怒りに對したまふ。

イエスはひとり地の上にゐたまふ。地はイエスの苦痛を感じてその苦痛を分ち擔はうとしないのみならず知りさへもしない。イエスの苦惱を知るものはただ天とイエスのみである。

イエスは園にゐたまふ。みづからを亡ほし全人類を亡ほした最初のアダムのやうに歡樂の園にゐたまふのではない。みづからを救ひ全人類を救はれた苦惱の園にゐたまふ。

イエスはこの苦痛とこの放棄とおそろしい夜のうちにゐてたへしのばれる。

イエスはこのときただ一度のほか決して歎かれたことはなかつたと私はおもふ。このときイエスはそのはなはだしい苦しみにもうたへきれないやうにして歎かれた。「私の心はいたくうれへて死ぬばかりであ



イエスは人々のがはからの同伴と慰めとを求めたまふ。このことはその全生涯をつうじてただ一度のことである、私にはさうおもはれる。\*しかしそれをすこしもお受けにならない、なぜなら弟子たちは眠つてゐる\*。

イエスは世のをはるまで苦悶のうちにゐるたまふであらう。この時のあひだ我々は眠つてはならない。

イエスは、あらゆるものにうちすてられ、自分とともにゐて目をさましをれとて選ばたまうたその友らにもうちすてられながら、その友らの眠つてゐるのを見て、自分の臨む危険でなく反つて彼らの臨む危険のゆゑにうれひなげき、彼らの忘恩のあひだにも彼らのために心からなる愛情をこめて彼らみづからの救ひと彼らの福とをつけをしへ、心は熱すれども肉體はよわきものであるとさとされる。<sup>(三)</sup>

イエスは、彼らが彼のことをおもひあるひは彼ら自身のことをおもつて眼をさましてゐるといふことをせずなほも眠りつづけてゐるのを見、いたはつて彼らをおこさぬやうにし\*彼らを彼らのやすみのうちにまかせおきたまふ。<sup>(四)</sup>

イエスは父の意志の定かならぬゆゑに祈り死をおそれたまふ。しかし意志を知りたまうたのちはこれに身をささげるために進みたまふ。 *Fannus processit (Joannes).*<sup>(五)</sup>

イエスは人々にねがひたまうた、さうしてそれはきかれなかつた。

イエスは弟子たちの眠るあひだに彼らの救ひをほどこされた。

イエスは義人たちの眠るあひだ、その一人一人に救ひを施された。生れるまへの虚無のうちに、生れたのちの罪のうちに眠るあひだに。

イエスはこのさかづきを自分から過ぎ去らせて下さいとただ一度だけ祈りたまふ。さうして\*それも\*従順の心をもつて。またもし飲まなければならぬのであるならば受けさせて下さいと二度だけ祈りたまふ。<sup>(七)</sup>

うれひのうちなるイエス。

\*イエスは友のみな眠つてをり敵のみな目ざめてをるのを見、その身をまつたく父にゆだねたまふ\*

\*イエスはユダのうちに敵意を見ず反つて愛する神の命令を見たまふ。敵意をすこしも見たまはぬゆゑにユダを友とよびたまふ\*

イエスは死の苦悶に入るために弟子たちからはなれたまふ。イエスをまねるためにはどんなに近いどんなに親しい者からもはなれなければならない。



イエスは、苦悶のうちに、この上もなく大きな苦痛(九)のうちにゐたまふのであるから、一そう長く我々は祈らう。

我々は神の慈悲に向つて歎願し、我々を罪のうちに平穩に見すておきたまはず罪のうちより救ひ出したまへとねがふ。

神がその御手よりかすかすの主(十)を我々に遣はしたまふなら、おゝ！ 眞心から彼らに従ふことはなんと必要なことであらう！ それによる貧困と出来事とはまぬがれない。

「汝を慰めるがよい、もし汝が私を見出さなかつたならば、汝は私を捜しはしないであらう。

「私は私の苦悶のときに汝をおもひ、血のしづくをかやうにも汝のために流した。

「これこれのことがらを、もしその折がきたら、汝はりつばにおこなふかしらと考へることは、汝を試練にかけるといふよりはむしろ私みづからを試みることである。\*もしその折がきたら私がそれを汝においておこなはう\*」

「汝は私の律法(十一)に導かれるがままになるがよい。私から働きかけられるがままになつてゐた聖なる處女と諸聖徒とをどんなに私がよく導いたかを見よ。

「父は私(十二)のするすべてのことを愛したまふ。

「汝は、汝みづからは涙を流すことなくして、つねに私が私の人性の血を流さなければならぬことを望むのか。

「汝の回心、それが私のなすべきことである。すこしもおそれることはない、私に向つてのやうに信頼をもつて祈るがよい。

「私は聖書における私の言葉をつうじ、教會における私の靈をつうじ、私の黙示をつうじ、祭司達における私の力をつうじ、信者における私の祈をつうじて、汝とともに在る。

「醫者は汝をいやすことがない、汝はつひには死ぬであらうから。汝をいやし體を不滅のものとするのは私である。

「もろもろの鎖と身体的なる隷屬とをたへしのべ。私は汝を今はただ精神的なる隷屬より救ふばかりである。

「私は誰よりも一そう深く汝の友である、なぜなら私は誰よりも一そうよく汝のためにつくした。ほかの者は私が汝のためにたへしのだことをたへしのではくれぬであらうし、汝の不實と無情との時にあつては、ちやうど私が私の選んだ人々に對し\*聖なる秘蹟において\*したやうに、またしようとしてゐる。



るやうに、またするやうに、汝のために死んでくれるといふことはないであらう。

「もし汝が汝の罪を知るならば汝はさぞ氣をおとすであらう。——主よ、きつと私は氣をおとすことでせう。私はあなたの證言によつてそれらの「罪の」よこしまを信じますから。——「氣をおとすてはならない。なぜなら汝に汝の罪をつけをしへる私は汝をその罪よりいやすことができる、さうして私が汝にそれをつけるのはいやしてやりたいとおもつてゐるしである。汝は汝の罪をつぐなひゆくに於て汝の罪を知りゆくであらう、さうしてやがてかうつけられるであらう『見よ罪は汝によつてつぐなはれた』されば汝の隠れたる罪のためにまた汝の知りえたる罪のひそめるよこしまのために悔改めよ」

——主よ、私はあなたにすべてをあたへる。

——「汝が汝の汚れたるものを愛したよりは一そうよく私は汝を愛する *ut immundus pro Iufo.*」<sup>(10)</sup>  
「その榮光は蟲にして土なる汝にでなく、私にあらんことを。」

「私自身の言葉も汝においては悪・虚榮・或は好奇の機縁となることを汝の指導者に表明するがよい。私は私のうちに高慢・好奇・邪欲の深淵を見る。そこには私と神或は私と義しきイエス・キリストとの關係は何もない。さうであるのにイエスは私のゆるに罪とせられたまうた。すべて汝の災厄は彼の上におちかかつた。<sup>(11)</sup>憎悪は私よりも彼にこそがれた、が彼は私を憎むどころか、私が彼のもとに行き彼を助ける

ことをみづからの榮譽としてゐたまふ。

しかし彼はみづからをいやしたまうた、まして私をいやしてください。

私の傷を彼の傷に合はせ私を彼につながなければならぬ。さうすれば彼は彼みづからを救ふことに於いて私をお救ひになるであらう。これはさきに延ばすべきことではない。

*Eritis sicut dii scientes bonum et malum.* <sup>(12)</sup> すべての人がこれはよいとか悪いとか判断しながら、また、出來事に會つてあまりにも多く苦しむ或はあまりにも多く喜びながら、神をつくつてゐる。

小さなことながらを大きなことながらのやうにしておこなふこと。それを我々のうちにおこなひ我々の生をきたたまふイエス・キリストの威容のゆるに。また大きなことながらを小さなさうして容易なことながらのやうにしておこなふこと。その全能の御力のゆるに。

- (一) ヨハネ一ノ三三「心を傷め悲しみて」(二) マルコ一四ノ三四 (三) マタイ二六ノ四〇「弟子たちのもとに來りその眠れるを見てマテロにいひたまふ『汝らかく一時も我と共に目を覺しをることあたはぬか。誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ、げに心は熱すれども肉體よわきなり』」(四) マタイ二六ノ四三・四四  
(五) マタイ二六ノ四六。イエス弟子たちのもとに來りていひたまふ「今は眠りてやすめ。見よ時近づけり、人の子は罪人らの手に付さるるなり、起きよわれらゆくべし *Surgite, eamus* 見よわれを賣る者近づけり」  
(六) ヨハネ一八ノ四。ユダ「組の兵隊と祭司長・パリサイ人らよりの下役にして炬火武器を携へたる者どもとをつれて近づく。『イエスおのれに臨まんとする事をことごとく知り進み出でて *processit* いひたまふ』誰を



尋ねるか』答ふ『ナザレのイエスを』(七) マタイ二六ノ三八・四二 (八) 同二六ノ五〇 (九) ルカ二二ノ四三 (一〇) 「泥がついて汚いために」ホラチウス書簡集第一巻第二書簡五ノ二六に「(ユリシス)は汚い犬、泥だらけの豚の生活をした」(一一) コリント後五ノ二一「汝ら神と和らげ。神は罪を知りたまはざる者を我らの代りに罪となしたまへり、これわれらが彼にありて神の義となるをえんためなり」(一二) 創世三ノ五。蛇エバを誘つて、もし汝ら園の樹の果を食ふならば汝らの眼ひらき「汝ら神のごとくなりて善悪を知るにいたる」ことを神は知りたまふ、それゆゑ食ふべからずと命じたまふなりといふ。

五五四 イエス・キリストは復活の後、その傷にのみふれることをおゆるしになつたやうにおもはれる。

Noli me tangere. (一) 我々はイエスの苦惱にのみ結びつかなければならぬ。

イエスが交りのためにその身を興へたまうたのは、最後の晩餐においては死ぬべき者として、エマオの弟子たちに對してはよみがへれる者として、全教會に對しては天に昇れる者としてであつた。

(一) 甦へられたイエス、墓詣りに來たマリアにいひたまふ「われにさはるな、(ヨハネ二〇ノ一七) われ未だ父のもとに昇らぬゆゑなり」

五五五 「汝をほかの人々にくらべるな、私にくらべよ。

もし汝が汝をくらべる人々のうちに私を見出さないなら汝は汝を一人のいとふべき者にくらべることにならう。

もし汝がそこに私を見出すならば汝をその私にくらべよ。しかし一たい汝はその私に何をくらべるので

あるか。汝をかそれとも汝のうちにある私をか。汝であるならばその汝はいとふべき者である。私をであるならば私を私にくらべることとなる。しかるに私はすべてにおいて神である。

「私はしばしば汝に語り汝に忠告する、なぜなら汝の指導者は汝に語るができないからである。私は汝が指導者を持たぬことを好まない。

「おそらく私は汝の指導者の祈にもこたへて語りまた忠告するであらう、さやうにして彼は汝に知られることなく汝を導く。

「汝は、私を所有しなかつたならば私を尋ね求めはしないであらう。

\* それゆゑ汝はうれへてはならない。\*

(一) この原稿の左上にパスカル自筆の文字あり、諸版はこれが判讀を斷念してあるがI版によれば Singin とよめるといふ。これは指導者云々の本文を要約することにならうか。パスカルは長い逡巡の後つひにサンランを指導司祭にえらびこれに絶対服従を誓つてポール・ロワイヤルに入つた。



15710

印刷 昭和23年9月5日



發行 昭和23年9月10日

パ ン セ 上 定價 250 圓

|     |                                                       |     |
|-----|-------------------------------------------------------|-----|
| 譯 者 | 津 田                                                   | 榎 本 |
| 發行者 | 柴 野 方                                                 | 廣 彦 |
| 印刷者 | 富 森 茂                                                 | 彭 社 |
| 發行所 | 世 界 文 學 社                                             |     |
| 印刷所 | 内 外 印 刷 株 式 會 社                                       |     |
|     | 京都市下京區鉄屋町通四條下ル<br>日本出版協會會員番號A219067<br>京都市下京區西洞院七條南入ル |     |



終